“３バカ”と“ツインタワー”と２人の女の子

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“３バカ”と“ツインタワー”と２人の女の子

【Ｎコード】

Ｎ３９５２Ｄ

【作者名】

イヌズキノネコ

【あらすじ】

葉山中３年の山田浩介を取り巻くクセのある仲間たち。そんな彼らの楽しい修学旅行風景。大人になられた方にはどこか懐かしく、今学生である方には“そういうのもいいなぁ”と感じられる、そんな作品です。

1．バスの中で（前書き）

この物語は、現在私が考えている学園コメディ小説の先行版という形で作成したものです。皆さんに読んで頂き、続きが読みたいと思って頂けるかどうかを知りたくて書きました。

皆さん、ご協力お願い致します。

1．バスの中で

車内を包む寝息。旅行最終日は、疲れた体を休めるための休息日となっている。

2泊3日の修学旅行は、最後の目的地に向かって現在進行中。

揺れるバスの中では、教師と生徒が揃って体力の温存を図っていた。俺もみんなの眠気に誘われて、このゆりかごの中でゆっくり目を閉じた。

「寝るなよ、浩介」

俺の休息に誰かが“待った”をかけてくる。俺は虚ろな目を声のする方へと移動させた。

視線の先は、俺の隣の席。そこで腕組みをして、退屈そうな顔をしている男の子がいる。

彼の名前は北山　翔（きたやま　しょう）。小学校時代からの親友で、日本人の父とイギリス人の母をもつ。綺麗な肌、整った顔、鮮やかな金色の髪、セルリアンブルーの瞳は、彼がハーフである紛れもない証であり、浮かない表情ですら絵になっていた。

「なんだよ、翔」

「なんだじゃねぇ～よ。なんで修学旅行中に寝ようとしてるんだよ」

「そのセリフ……そのまま返す。なんで、こんな退屈な時に寝たらいけないんだ？　周りを見ろ、みんな寝てるぞ」

「かぁ～、わかってないな。こういう時だからこそ、オレたちが盛

り上げるんだろうが。そう思うよな、由奈」

翔が前の席に座っている女の子に声をかける。

「だよね。浩介は周りに流されて、自分がやらなきゃいけない事が見えてないんだよ」

そういうと、前の席から少し茶色の入った髪を揺らしながら女の子が顔を出してきた。

彼女は森下　由奈（もりした　ゆな）、俺の家の隣に住んでいる幼馴染だ。誰とでもすぐに仲良くなってしまう社交的な子で、うちの学校に彼女を知らない者はいない。小顔にクリクリっとした瞳、くっきりしている二重瞼、淡いさくら色の小さな唇と素晴らしいパーツの揃った何とも可愛らしい顔をしている事が男子から好評で、女子からもその可愛さを認められている人気者の女の子だ。

由奈はこっちを向くと、翔と同じように退屈そうな顔をして俺を睨んでいた。

「はいはい、そうですか。私が悪うございました」

「何よ、その態度は？　本当にやる気あるの？」

「別に……」

「何が『別に……』だ、バカ野郎！　お前がそんなんだから、こんな事になってるんだよ！」

「はぁ？　俺のせいか？」

「ああ、浩介のせいだな」

「うん、浩介のせい」

２人して俺を責め立ててくる。

この２人は、一度言い出した事をすぐに引っ込めるような人間ではない。ここで渋ったところで、何の利益もない。だから俺は嫌な顔をしながらも、２人の話に付き合う事とした。

「わかったよ。で、何をするんだ？」

「よくぞ聞いてくれた。オレが提案するのは……ジャーン！」

翔がバッグから取り出したものは……。

「なあ、それをやるのか？」

「そうだとも！」

自信満々に答える翔を無視して、俺は由奈の方を向いた。

「由奈はどう思う？」

「う～ん。いい線はいっているけど、それはちょっとねぇ……」

「だよなぁ……」

「何だよ。これに不満でもあるのか？」

「翔、ここがどこだかわかってるか？」

「ん？　確か今は関門海峡を……」

「そう、今いるのは関門海峡。本州と九州をつなぐ橋の上だ。そんな場所で人生ゲームをやるバカがどこにいるんだよ。本州か九州かもわからない場所で人生なんて決められるか！　……って、俺が聞きたかったのは、そこじゃない！　どこを走っているか以前に、俺たちは今バスの中にいるんだ。それをやるスペースが、どこにあるんだよ！」

俺は呆れながらも、翔の解答に突っ込みを加えた。

「でも……楽しいぜ」

「お前、昨日散々やっただろうが。そのせいで……、ハァウ～」

「何眠そうにしてるんだよ」

「だ・れ・の・せ・い・で、こうなっていると思ってるんだ」

俺は眠気を堪えながら、返事を返した。

――昨夜、翔の提案でクラスの男子による『人生をうまく生きていけるのは誰だ！』選手権が開催された。まず、人生を生き抜く上では運と戦術が必要という事から、トランプゲーム大富豪による予選が始まった。予選を勝ち抜いた選りすぐりの戦士たちは、次のステップへと進んでいった。そして、最後に４人の精鋭が残った。その時、時刻はすでに午前４時だった。

眠気に襲われながらも、何とか生き残った者たちに待っていたの

は、人生ゲームによる決勝戦。戦いは接戦となり、最後の最後まで気の抜けないものとなった。そして……人生を最も上手に生きる男に選ばれたのは――

「だいたい、優勝しといて何でまたやりたいんだよ？」

「だってオレ、勝負には勝ったけど……人生においては負けたから」

「はぁ？」

「だってそうだろ？　みんなして家族作りやがって……どうしてオレだけ独り身なんだよ！　浩介なんか子供１０人もこしらえてさ」

「えぇ――！！　浩介……そんなにつくちゃったの？」

「いや、確かに作ったけど……」

「『友達百人出来るかな？』って歌、嘘だと思っていたけど、浩介は子供だけでその容量を満たせるんだぜ」

「なんでそうなるんだよ！」

「だって、今の年で１０人って事は……」

「コウスケ……」

翔と由奈が心配するようにこっちを見ている。

「おまえらバカか！」

「何よ！　本気で心配してあげてるのに。そんなに作ったら、生活するのだって大変なのよ。わかってる？」

「由奈、おまえこそわかってるのか？　翔の話はすべてゲームの中の事。実際にそうなっているわけじゃない」

「あっ！」

ようやく目を覚ました由奈を見て、俺は一つため息をついた。

「え～と、話を戻そう。何をするか、だったよな？　まず、翔の意見は却下」

「はぁ……」

翔が無念の声を上げる。

「そしたら今度は私の番ね」

「由奈は何をしたいんだ？」

「へっへっへぇ～。やりたいのは……コレ！」

「なっ！　それは」

由奈の取り出したものに翔が驚く。実は、俺も驚いていて……そして呆れている。

由奈が取り出したものとは、手先の器用さと集中力が要求される――

「ジェンガ？」

「そうで～す。しかも、最新のヤツ」

由奈が手に持っているモノは、大人向けに発売されたジェンガだった。

最近のジェンガは、積み上げられた塔から塔を支える役割を持つ木のピースを一つ抜き取って上へ積み重ねていくという従来のシンプルなゲーム内容に加え、一つ一つのピースに質問が書かれていて、ピースを取った者はその質問に答えなければならないというバラエティー要素が含まれている。由奈が持っているのは、質問が大人向けになったバージョン。俺の記憶では、恋愛の事から夫婦間の事まで、シビアな質問が書かれているモノだったと思う。

「昨日やったら、これが異常なまでに盛り上がってね。それで、今度はここでやろうかと」

女子の間で行われたらしい大人のジェンガ。

うちの学校の女の子たちは、普段どんな事してるんだよ。

想像するのが怖い。

「香苗、昨日盛り上がったよね？」

由奈の隣で俺たちの話を黙って聞いていた須藤　香苗（すどうかなえ）に、突然話が振られる。

「え？　……うん」

沈んだ表情で答える香苗。それを見て、昨日行われたジェンガがより怖くなった。
だけど、怖いもの見たさという人間の本能が、俺の心を動かす。
そして、言わなきゃいい質問を由奈にぶつけてしまった。

「それって大人向けだろ？　みんな質問に答えられたのか？」

「うん！　大丈夫だったよ」

「でも、夫婦間の事とかあるだろ？」

「それはね、自分の親の事を話すの」

「……え？」

「例えば、歩美の親は最近バードウォッチングにハマっていて、休みの日になると必ず旅行へ行くようになったんだって。そのせいで家計が火の車になっているとか……。理香の親は、この前の夫婦ゲンカで菜箸とフォークによる日米チャンバラ合戦が行われて、あわや国際問題に発展するような大惨事になりかけたとか……。あと、香苗の親は日々ブート・キャンプで体力づくりをしているんだって。なんでも男の子が欲しいらしく、今から弟を作るために――」

「もうわかった！　これ以上、言わないでくれ」

女の子の見えざる部分と各々の家庭状況を垣間見てしまい、なんとなく罪悪感が胸の底から湧きあがってきた。

「あ、そうそう。私の時は、自分の親を悪く言うのは出来ないと思

ってね、浩介の家のことについて語っちゃった」

「な、何してるんだよ！」

由奈の発言によって罪の意識は消えた。その代り、怒りという名の業火が俺の身体を埋め尽くした。

「ご、ごめん……」

「ごめんってなぁ！」

「本当に……ごめんなさい……」

ウルウルと瞳に涙を浮かべる由奈に、俺はそれ以上何も言えなくなった。

「……もうわかったから、そんな顔をするな」

「……うん」

「まったく……」

「浩介……」

「ん？」

「そしたら、ジェンガ一緒にやってくれる？」

怒りのあまり、話の根本を忘れていた。

「由奈、それもさっきと同じ。やるスペースがないだろ？　いや、それよりもここでやるのは場違いじゃないか？　ここ、メッチャ揺れるし……」

「揺れるからいいんじゃない。常にスリル満点！　あと、スペースならもう確保してあるから」

香苗の艶やかな黒髪に覆われた頭を指さして、由奈がほほ笑む。

「えぇ――！　あたしの上でするつもりなの？」

「あ、香苗も参加したかったの？」

「いや……そうじゃないけど」

「なら、問題ないわね」

「問題あるわよ！」

「香苗、あんた最近……身長が伸びないって悩んでいたわよね？」

困惑した顔で香苗がうなずく。

「香苗の頭の上にジェンガが乗っかったら……」

由奈の言葉から何やら想像している様子の香苗。しばらくすると、彼女の顔がパッと明るくなった。

「あっ！　身長が伸びる！」

「そうよ、身長が伸びるの。もう悩み無用、なのよ」

「それじゃあ……提供してあげよっかな？」

由奈の説得により、香苗の許可が下りた。

香苗、お前がやさしい子であるのは知っている。
ノリがいい事も知っている。
だけど、ここは許可しちゃダメだろ？

香苗を見ながら、ジェンガ決行という事態に対して、俺は大きなため息を一つ吐き出した。

「よっしゃ！　そしたらやるか」

先ほどまで黙っていた翔が、息を吹き返す。

「じゃあ、準備するね」

そういうと、由奈は香苗の頭の上にジェンガをセッティングし始めた。

数分後、ジェンガはその姿を現した。
動くバスの中で、不安定な人間の頭の上に、やや斜めになりながらそびえるジェンガの塔。ピサの斜塔よりも、ここに建っている塔の方が難易度は高いだろう。グラグラと揺れながらも立ち続けるジェンガ。これは思っていた以上のスリルがある。

「そしたら始めるよ」

由奈が先陣を切って、ジェンガに挑む。静まり返ったバスの中で震えている指が、場の緊張感を高めていく。
由奈の指が一つのピースを慎重に押していくと、反対側からそれが飛び出してきた。由奈は震えを我慢しながら、飛び出たピースをゆっくり抜き取っていく。

「ふぅ……」

一つ息を吐き出して、途中まで抜き出していたピースを一気に引っ張った。

「やったぁ……」

「そしたら、次は質問だな」

翔が緊迫した雰囲気の中で、冷静にゲームを進行させる。

「え～とね、『ファーストキスは、いつ、どんな人としましたか？』だって」

質問を聞いて、俺はガッカリした。というのも、由奈について知らない事などないからである。

ん？　ちょっと待てよ。
このゲームの醍醐味である質問って……
俺たちにとっては、くだらないモノなんじゃないか？
だって知らない事なんてないし……。

俺はその時、初めてこのゲームの欠点を知ってしまった。

「そしたら、質問に答えま～す」

楽しく振舞う由奈とは対照的に、答えを知っている俺と翔は“わかっているから、早く言え”と内心思っていた。

「ファーストキスは、まだ……」

俺と翔は“やっぱり”と思った。

「なんてね」

「――えっ？」

２つの声が重なる。

「実は私が幼い時に、近所の男の子とキスをした事があります。その子とは、昔よく遊んでいて、一緒に昼寝とかもしていたの。ある日、寝ぼけた彼が私に襲い掛かってきて、そのまま唇と唇が……キャ、恥ずかしい」

頬を赤くして、照れながら話す由奈。

「なんだと！　由奈に襲い掛かるなんて、どんな奴だよ！」

そこへ翔が突っかかる。

「翔もよく知っている人だよ」

「由奈の近所で、女の子に襲い掛かるようなひどい事をする奴？

そんな奴……いたっけ？」

翔は頭をフル回転させながら、問題の答えを探しているようだ。
その横にいる俺はというと……冷汗をながしながら、動揺していた。

由奈の近所で、昔よく遊んでいた男の子。
昼寝を一緒にするような仲の男の子。
それって間違いなく……俺じゃん！

心を取り乱している俺を見て、由奈がニヤリと笑う。

由奈のやつ、まさか……嘘をついたのか。
質問に対する答えを、俺への心理攻撃として利用するために。
いや待てよ。由奈がそこまで計算高いはずがない。
そうなると、本当に……。

由奈の本心はわからないが、彼女の放った答えは結果として2人の男子から平常心を奪った。

「はい、そしたら次は浩介ね」

「くぅ……」

気持ちがグラついている状態で、俺のチャレンジは始まった。

俺はジェンガに向かって、ゆっくりと手を伸ばしていく。ただでさえ震える手が、動揺しているせいで余計に震えている。
塔を支えるピースに指が触れた時、震えが塔に振動として伝わっていった。揺れる斜塔、その揺れ方は半端じゃない。俺は緊張の糸

を緩めることなく、震える人さし指で塔の真ん中に位置するピースを押していった。

「……よし！」

思っていたよりも事が上手く進んでいく。ついついガッツポーズをとってしまうくらい。

反対側から飛び出したピースを引き抜くと、そこでやっと張り詰めていた糸が緩んだ。

「じゃあ、質問ね」

由奈が期待に胸を膨らませて、俺に催促してくる。

「ああ。え……と、『あなたがプロポーズした（された）時の言葉は何ですか？』」

「おお～、それ知りたい」

さっきまで険しい顔をしていた翔が、笑顔を見せている。

「いいねぇ。ナイスチョイス、浩介」

歓声を上げる2人。それとは真逆に、俺は唸（うな）っていた。

どうしよう……。

悩む俺の頭上で、悪魔と天使が『言え！』と『言ったらダメ！』を交互に言い合っている。

『言っちゃえよ！』

『ダメよ。悪魔の言う事なんて聞いたらいけないわ』

『言っちゃえば、楽になるぜ』

『何言ってるのよ！　あんたはいつもそう。浩介に甘い言葉をかけて、そして恥をかかせて不幸にしようとしている』

『はぁ？　そういうおまえだって、浩介を何も言えない典型的な日本人に仕立て上げようとしてるじゃないか』

『偉そうなこと言ってくれるじゃない。あんた、そういう事は夜中一人でトイレに行けるようになってから言いなさいよ！』

『そういうおまえだって、夜一人で寝るのが怖いとかいって、俺の布団に入ってくるなよな！』

『何よ！　意気地なしの癖に、いざって時に男らしい一面を見せる悪魔』

『何だよ！　泣き虫なのに、泣き顔がやたら色っぽくて品のある天使』

おまえら……。

『ん？　どうしたの、浩介。そんな怖い顔して』

『おまえが余計な事を言うからじゃないか？』

『ちょっと、私のせい？　あんたのせいじゃないの？』

おまえら……うるせぇ――！！

『うわぁ』

『キャ』

天使と悪魔は、俺の叫ぶ声に驚き、何も話さなくなった。

何をペチャクチャ喋ってるんだ！

あ～もう。どうでもよくなってきた。

吹っ切れた俺は、質問の答えを躊躇する事なく口にした。

「俺の親のプロポーズは、とある居酒屋で行われた」

「居酒屋さんで？」

由奈が前の座席から身を乗り出して訊ねてくる。

「ああ、そうだ」

「で、どんな言葉でプロポーズしたんだよ？」

翔の急かしてくる言葉に対して、俺は一度深呼吸をし、落ち着いた調子で続きを話した。

「親父は焼酎を飲みながら、向かいに座った母さんにこう言ったんだ。『俺は最強の男だ。そんな俺が恐れるのはおまえだけ。おまえ以外に俺と付き添っていける奴なんていない』ってね」

「それで、それで？」

「母さんは『あんたみたいな馬鹿な男を見てくれる奴なんて、あたし以外いないだろうね』って、返事したらしい」

「ほぇ～」

変な声を出す由奈の眼は、いつもよりも輝いていた。

「なんかいいよね、そういうの」

「いいかぁ？」

「ああ、オレもいいと思うぜ。オレの親なんて、バラを片手にプロポーズしたんだから」

「バラを？」

「それって、ロマンチックかも。翔の話も聞かせてよ」

「いいぜ」

翔は姿勢を正して椅子に座りなおし、俺たちに真面目な顔を見せた。

「オレんちの親は国際結婚だから、プロポーズの場所は日本じゃなくロンドンのあるレストランで行われたんだ。その日、うちの親はいつもよりも着飾った格好で店を訪れた。なんでも、その日が二人にとっての記念日だったらしい」

「何の？」

「そこまではしらねぇ……。で、レストランで食事を済ませて、そろそろお別れって時に、父さんが一本のバラを取り出したんだ。取り出したバラには華がなく、緑色をした茎の部分だけのモノ。それを片手に持って、父さんは言った。

『私はこのバラのように棘しか持たない人間だ。しかし、あなたは違う。私にはない綺麗な心を持っている。もしも私と居続けてくれるのなら、私はこのバラのように綺麗な華を咲かせることができるだろう』

そういって父さんは、手に持っていたバラに花を咲かせたんだ。誰だって知っているマジックだけどな。花の咲いたバラを母さんに手渡して、父さんは最後にこう言った。『私のすべてをあなたのために捧げます』って。

……どう？　メチャクチャくさい話だろ？」

「う～ん。やり過ぎって感じはあるけど、なんかお前の親父さんっぽくて俺は良いと思う」

「由奈はどう？」

「私は、そういうの好きだなぁ……。もしも私がそれをされたら、絶対ＯＫしちゃう」

由奈の回答に、翔は首を傾げながら「そういうもんか……」と呟いた。

親のプロポーズ話は、俺たちをしんみりとさせた。

まともな告白で結婚し、誠実な人生を送っている親。いつもは口

うるさいと思うばかりだけど、こうやって見ると“人から褒められるような立派な人たちなんだ”と気がつく。そんな親から生まれた子供が俺たち。いつもバカなことばかりして、本当に親の血を受け継いでいるのか、少し不安になり、同時に親に申し訳ない気持ちにもなった。

「ねぇ、香苗。あんたも2人の話、素敵だと思うよね？」

由奈が香苗に同意を求める。香苗は首を縦に振って、その意見に賛成した。俺たちよりも良識的な香苗がそう思うという事は、やっぱり俺たちの親は他人に誇れる立派な人間なのだろう。

第3者の意見を聞いて、俺と翔は自分たちの考え方が誤っていた事を知り、万人（ばんにん）がどう考えるのかを知った。

その時、目に映る映像が変化を起こし始めた。

「……あっ！」

無意識に俺の口から言葉がこぼれ落ちる。

親の話にばかり気を回していた俺たちは、ある事を忘れていた。

香苗の頭から滑り落ちていく、忘れられていたモノ。それは長方形の形を崩しながら、地面へと落ちていった。

「えっ？」

由奈もその光景を茫然と見つめながら、忘れてかけていたものを思い出したようだ。

香苗の頭から落ちたモノは、音を立てて地面に落下した。茫然とした面持ちの俺に、隣の男は容赦なく声をかけてきた。

「はい、浩介の負け」

嬉しそうにジャッジをする翔。

「ちょっ……」

「あ～あ、浩介の負けかぁ……。意外と早く終わっちゃったね」

「ちょっと待った！　今のは有りなのか？」

「有りだな。だって浩介、まだ手にジェンガ持ってるじゃん」

「ホント。これじゃあ、言い逃れできないね」

手にしっかりと握られた1ピースのジェンガ。俺はそれを強く握りしめて、納得のいかない気持ちを吐き出した。

「なんでワンピース、俺の手の中にあるんだよ。チクショ――！」

「罰ゲームはすべての質問に答える事だからね。すべてを手にするなんて、さすが……」

「よっ、海賊王！」

「うるせぇ！！」

俺の叫び声がバスの中を響き渡る。それを聞いて、周りで寝ていたクラスメイトが深い眠りから目を覚ます。初めは俺らの周辺だけだったが、起きた生徒がざわざわ騒ぎだすと、次第に眠りから覚める者はその数を増やしていった。

「山田、うるさいぞ！」

俺たちの遥か前方から担任の吉田先生が怒鳴り声を上げる。

「それから森下、北山も。おまえらはもう少し静かに出来んのかぁ……。あと須藤、おまえもだ。おまえがちゃんとしてくれれば、こうならなかったはずだろ！」

騒がしくなったバスの中を一喝した声が響き渡る。それによって、バスの車内は元の静かな場所へと戻っていった。

騒ぐ原因を作った俺たちは無言になって、しょんぼりと俯いている。その中でも、香苗は一番落ち込んでいた。俺たちに乗せられて無理やりゲームに参加させられた子なのに、被害にあっている可哀想な子なのに、担任は俺たちよりも香苗に対して一番厳しい態度をとった。

俺、翔、由奈の3人はそんな香苗に頭を下げながら、心の中で謝った。

香苗、ごめん。

無理やり参加させて、ごめん。

さっき身長が伸びるとか言ったけど……

あれ、真っ赤な嘘だから。

信じるなよ。

2．遊園地：絶叫マシン編

バスに揺られること３０分、俺たちは最終目的地へと辿り着いた。そこは、修学旅行で唯一楽しみにしていた場所。俺たちを楽しませてくれる場所。広大な敷地の上に数多のアトラクションを建設し、一つのテーマを基に作り上げられた――そう、遊園地である。

バスを降りた俺たちは遊園地の中へ入場した後、担任の指示を受けて入口付近の広場で男女一列に並ばせられた。クラス毎に並んでいる紅白の列。その一番左端の列に俺はいる。

俺の前には、翔が立っている。俺と翔は同じ１７６センチという身長。入れ替わっても問題はない。しかし、翔は俺が前に立つことを嫌っている。というのも、小学生の頃、翔は小柄な子供だった。いつでも列の先頭に立って、号令をかける役割を担っていた。中学校に入って、翔は異常な成長を見せた。一年で１５センチ伸びるという驚異的な記録を作り出し、ついに俺と肩を並べるまでになった。昔から俺が前に立つ姿を見たことのない翔にとって、俺が前にいるという光景には違和感があるらしい。そのため、俺が後ろ、翔が前という隊形が自然と出来ているのだ。

「葉山中学校３年生のみんな」

学年主任でもある吉田先生が拡声器を使って、俺たちに話しかけてくる。

「今から１５時まで自由時間とします。昼食は各自でとってください。修学旅行の最後という事もあって、羽目を外し過ぎる生徒が出てくると思いますが、葉山中の生徒として恥の無いよう、節度ある行動を心がけるように。話は以上だ。それじゃあ、解散！」

自由解放が宣言された瞬間、生徒たちが一斉に四方八方へと散らばっていく。それはドラマでよく見られるスクランブル交差点のような光景だ。
その中から一人の女の子が人込みをかき分けて、こっちへと駆け寄ってくる。普通の女の子と変わらないくらいの身長で、凹凸の少ない細身の体形。元気の良さが遠くからでも窺えるような……そんなオーラを纏う女の子。そう、森下　由奈である。

「浩介、翔。これからどうするの？」

満面の笑みを浮かべた由奈は、手を後ろに組んで身体を傾けながら、キュートなポーズで問いかけてきた。
自然にそういう仕草をする由奈にちょっとドキッとした俺は、由奈から目をそらして頬を人さし指で掻きながら、別の事を考えようと必死だった。そして、頭の中にある事が浮かんできた。それは、昨日友達とした約束だった。

――昨日、別のクラスにいる高山　拓登（たかやま　たくと）から今日の事について約束をされた。拓登が言うには、

「修学旅行の最後なんだから、いつものメンバーで行動しような！
たぶん、江梨香も同じ考えだと思うから……。あいつ、みんなと一緒に行動できない事をすげぇ悔やんでたし。だから、みんなで集まろう！」

という事だった。そして、最後にこう付け足した。

「俺が江梨香と美奈子に言っておくから、浩介は翔と由奈、あと香苗ちゃんに伝えておいてくれ」

使命を受け負った俺は、昨日のうちに3人への伝達を済ませた。しかし、翔と由奈は目の前に面白いモノが転がっていると、約束事をすぐに忘れる癖がある。おそらく、今回もそうだろう。
俺は約束を忘れている2人に思い出させる意味を込めて、由奈の問いかけに返事を返した。

「そうだな……。ひとまず、拓登たちと――」

「何グダグダ話してるんだよ！　まずはアレに乗りに行こうぜ」

俺の言葉が終り切るのを待たずして、翔が俺に肩組をし、自分勝手な意見を主張してくる。そして、空いている左手である場所を指さした。

「アレ、いいねぇ」

俺の隣で、由奈が翔の意見に賛成する。

まずい。このままだと約束が……。

俺の心境なんて知るはずもない2人は、話をどんどん進めていく。

「それじゃあ、決まり！」

そう言うと、翔は俺に肩組をしたまま強引に走りだした。

「ちょっと待った。最初からアレに乗るのか？」

少しでも時間を稼ぐために最後の抵抗を試みる。

「そうよ。いいじゃない、楽しみを後にとって置かなくても」
「そうそう。後になればなるほど、みんな集まりだすだろ？　並ばなくて良い時に、行っておこうぜ！」
「それはわかった。そしたら、拓登たちを待っ――」
「わかったんなら、何も言い分は無いな」
翔は俺の言葉を遮って、アレのある場所へと俺を引き連れていく。
やっぱり無理だったか……。
こうなる事は予想していた。おそらく拓登たちもわかっていることだろう。
もはやブレーキを失った2人を止める事はできず、俺は後で怒られる事を覚悟して、流れに身を任せた。

目の前にそびえる巨大なアトラクション。それは、この遊園地の目玉となっている超人気アトラクションだ。始まりから数秒間の内に時速１３０ｋｍの速さに到達し、高速の世界へと人々を誘(いざな)う。高さ約６０メートルから駆け降りる瞬間は、乗っている者に垂直落下の世界を見せ、２０階建てのビルから飛び降りたような錯覚を起こさせるという。
俺は前方に立ちふさがる巨大なモンスターを目の当たりにして、この先に待つ恐怖と喜びに武者震いを起こしていた。

「浩介、もしかして……ビビってる？」

「そ、そんなわけあるか！」

「だよね～。浩介がこんなモノにビビるなんて、あり得ないよね」

生き生きとした表情で、由奈が俺の顔を覗き込んでくる。

「行くぞぉ！」

もう待ちきれないといった感じの翔は、俺たちを他所（よそ）に一人歩きだしていた。

従業員の指示により、俺たちは一番前のシートに案内された。座ってしまった俺たちに、もう逃げる道は残されていない。あとは、その時を待つだけである。

「さあ、どんな事が起こるんだ？　ワクワクするぜ。オレたちに最大級のスリルを味あわせろよ。もし期待に応えられなかったら、今後おまえをジェットコースターなんて呼ばないからな！」

右隣に座っている翔が大声を上げて、出発の合図を催促している。

「ちょっと、翔！　さっき先生が言っていた事忘れたの？　恥じない行動をしなさいって言われたでしょ」

「だから、子供として恥じないように喜びを全身で表現してるんだろ？」

「なに自分勝手な解釈してるのよ。そんなに大声を出したら、周りの人に迷惑じゃない」

「別に気にするなよ」

「周りはいいとして、私が気になるの！　私だって本当は声を上げて楽しみたいのに、それを我慢してるんだから……。浩介からも何か言ってあげて！」

「え？　ああ……。翔、もう少し大人しくしろ。先生に見つかって、乗り物禁止になったら嫌だろ？」

「わかったよ！　以後、気をつけ……ます」

ちょっとふて腐れた顔をしながらも、翔は俺の言葉に従ってくれた。

丁度その時、発車の合図が響き渡った。

頭上から安全バーが降りてきて、俺たちを座席に固定する。身動きの取れなくなった俺にもう逃れる術はない……。鉄と鉄が擦り合される音は、俺の不安を更に煽(あお)ってくる。ゆっくりとした歩みで走り出すジェットコースターの中で、鼓動がやけに大きく聞こえた。

「それでは、行ってらっしゃい」

従業員の言葉を合図に、ジェットコースターが急激な加速をする。気を許している暇もなく、一瞬のうちに高速の世界へ。

「うわぁぁぁぁぁ」

「ヤッホゥ～」

「キャァァァァァァ、楽し～い」
3人の悲鳴（？）を乗せて、ジェットコースターは異次元の世界へと飛び出した。

◇

一方、その頃。
遊園地の入口付近にある広場では、女の子が一人立ち尽くしていた。
「山田く――ん、北山く――ん、ゆなぁ――！」
どうやら仲間と逸(はぐ)れたらしく、その眼には薄らと涙を浮かべている。
「どこに行っちゃったの……？」
顔を下に向けて、溢れる不安を地面に落とす。呟く声は、周りで騒いでいる中学生たちの中へ溶け込むことなく消えていった。
女の子は友達がいなくて一人でいるわけではない。ついさっきまで同じクラスの女の子たちに「一緒にまわろうよ！」と声を掛けられていた。けれど、彼女は「約束している友達がいるから……ごめん」とその誘いを断ったのだ。
でも……その約束をしたはずの友達は、今この場所にいない。彼女を置いて、どこかに行ってしまっている。
約束を破られた女の子は、ぶつける場所のない怒りをどうすればいいのかわからず、ただ現状を悲しみとして捉える事しかできない

でいた。肩まで伸びた黒い髪が元気なく垂れて、背中には辛く悲しい思いが背負われている。複雑に渦巻く感情を制御できず、足元に転がっていた石ころを蹴っ飛ばした。

「お～い！」

周りの雑音にかき消されることなく、響き渡る低めの声。

女の子はその聞き覚えのある声を耳にすると、顔を上げて勢いよく振りかえった。

「あ、やっぱり香苗ちゃんだ！」

彼女の視線の先には、人集(ひとだか)りの中から頭一つ分突き出た男の子の姿があった。その隣には、同じように頭一つ分突き出している女性がいる。彼らは人波に足を取られることなく、女の子の元へ一歩ずつ着実に近づいてくる。

人集りを抜け出すと、彼らの横にもう一人女の子が並んでいた。どうやら2人の連れらしい。小柄な体形であるが、その身体には女性としての特徴が既に表れている。髪を二つ結びにして、お下げを揺らしながら駆け寄ってくる姿は何とも愛らしい。まだあどけなさの残る顔は、お人形さんのようである。

3人と合流した女の子は、先程まで見せていた悲しげな表情から少し明るさを取り戻していた。

「あれ？　香苗ひとりなの？」

長身の女の子が、香苗と呼ばれる女の子に問いかける。

「うん……」

「ったく！　やっぱりこうなっちまったかぁ」

男の子はため息をこぼしながら、天を仰いだ。

「浩介君ひとりじゃぁ……ダメだったみたいだね」

「翔たちが強引に事を進めちゃったんだろうね。まったく……いつもの事とは言え、しょうがない奴らだよ！」

長身の女の子は、元々切れ目である眼を更に鋭く尖らせた。

「香苗ちゃん、ひとりで大変だったね」

「ごめんね、美奈子ちゃん。あたしが不甲斐無いせいで……」

「ううん、そんな事ないよ。だって香苗ちゃんはひとりになっても待っていてくれたんだから」

お人形さんのような愛くるしい顔をした美奈子という女の子に慰められて、香苗は溢れてくる涙を流さぬように必死で我慢していた。

「さてと……こんなところでグズグズ言っていても仕方ねぇし、俺たちもあいつらを追って移動するかぁ」

「そうだね。でも、何処に行ったんだろう？」

「美奈子、そんなの決まってるじゃない。あいつらの事だからジェットコースター辺りに行っているわよ、きっと」

「でも、江梨香。もしかしたら意表をついてお化け屋敷って事もあるぞ」

「ああ～確かに」

「ねぇ、メリーゴーランドという選択肢はないの？」

「美奈子……。メリーゴーランドに乗りたいと考える中学生なんて、あんたくらいだよ」

「で、でも江梨香ちゃん。香苗ちゃんは乗りたいって……」

「だから、あんたと香苗くらいなの」

「そう……なんだぁ……」

美奈子は肩を落として、澄んだ茶色の瞳を曇らせた。

「安心しなさいって。後でちゃんとみんなで乗ってあげるから」

江梨香の一声に、美奈子の表情が明るくなる。男の子の方は驚いた顔をしているが……。

「そしたら、まずはジェットコースターかお化け屋敷だね。香苗はどっちだと思う？」

「あたしはジェットコースターよりお化け屋敷の方が……」

「そっかぁ～、あんたジェットコースターに乗れないんだったね」

「うん……。どうせ行くなら、楽しめる方がいいし」
「わかった。そしたら、お化け屋敷に行ってみようか？」
「うん！」
香苗が大きく頷いて、彼らが進むべき道が決まった。
４人の中学生は横一列に並び、遊園地のマップを広げて、広場を後にした。

◇

ジェットコースターから降り立った俺たちは、各々の顔に“満足”の文字を浮かべていた。なんだかんだ言っても、こういう乗り物は人に普段味わえない楽しさを与えてくれる。
「いや～良かった」
「うん。ホント楽しかったね」
「そうだな」
「でも、浩介は最後までレバーから手を離せなかったなぁ～」
「そう言えばそうだね。もしかして、ホントにビビってたの？」
「そんな事ねぇよ！　ずっと手放しで乗っているおまえらが、異常なんだよ」

ニタニタとこっちを見ている2人から目をそらして、俺は遠くを見ながら一人歩き出した。

「じゃあ、次は……アレに乗ろうよ！」

後ろから由奈が俺の右腕に抱きついてきて、前方に見えるアトラクションを指さした。

「アレって……また絶叫系かよ！」

「そうだよ。ねぇ、いいでしょ？」

「連チャンは……」

「浩介。絶叫マシンを差し置いて、他に乗る物なんてあるか？」

翔の言葉を受けて、俺は乗りたいと思うモノをイメージした。色々なアトラクションが脳裏を横切っていく。乗りたいモノをイメージし終わった俺は、翔の目をじっと見つめて、きっぱりと言い切った。

「いや……絶叫マシン以外に考えられない！」

「そうだろ？」

「それじゃあ、次はアレに向かって、レッツ・ゴォ――！」

「おう！」

テンションの上がった3人は空高くこぶしを突き上げて、次なる恐怖へ向かって歩き始めた。

……あれ？

俺……何か重要な事、忘れてないか？

3．遊園地：コーヒーカップ編

「いや～楽しい」

満たされた表情の翔。

「次は？　次は？」

興奮冷め止まぬ様子の由奈。

「はぁ……」

若干疲れを感じている俺。

ここに着いてから約2時間。
俺たちは休むことなく、アトラクション巡りを続けている。絶叫グルメを味わい尽くして、もうそろそろ休息が欲しいと思っているが、連れの2人がそれを許してくれない。こいつらの体力は無限大なのか？　と、俺は呆れ果てていた。

「よし、そろそろアレに行こうか」

「えぇ～。もうアレに行っちゃうの？」

2人が言っているアレとは、俺たちの目の前にあるアトラクション――コーヒーカップの事である。

「俺もアレがいいなぁ」

「浩介まで……まだアレに乗るには、早いと思うんだけど」

「いいじゃないか。オレと浩介が行きたいって言ってるんだから、付き合えよ」

「うん……わかった」

由奈はしぶしぶＯＫのサインを出した。

絶叫グルメの最後にコーヒーカップとは、何ともオシャレな選択だ。“おいしいものを食べ尽くした後、心を落ち着かせるために飲む”のように、“楽しい事を体験し尽した後、心を落ち着かせるために乗る”という感じだろうか……。休憩が欲しいと願う俺に、今まで見守り続けていた神様がひとときの安らぎを与えて下さった、というわけだ。まあ、そんな安易な考えを一瞬抱いてみたものの、そういう事には絶対ならないだろう。この2人と乗る事を考えると、おそらく絶叫グルメの締めくくりに相応しい、おそろしい乗り物へと変貌するのだから。

俺たちは一つのカップに誘導され、その中でふざけ合いながら開始のベルを待っていた。

「それでは、皆さん楽しんでください」

カップがゆっくりと回り出す。カップは他のカップとすれ違いながら、一定の範囲内を動き回っていく。今までとは違って、周りの景色をしっかり目に収める事ができるのを俺は少し不気味に思いながらも、このゆったりとした流れを心地よく感じていた。

「それじゃあ――」

翔がカップ中央に取り付けられた円形のテーブルに手を伸ばす。テーブルの端を握ると、勢いよくテーブルを回転させた。

「えっ？」

カップの回転速度が上がる。普通に回っているカップの2倍くらいの速さだろうか。それでもまだ物足りないらしく、翔は更にテーブルを回転させた。

「うわぁぁ……」

周りの景色が全くわからない。あまりの回転スピードに、俺の動体視力では周りにある物を捉える事が出来なくなっている。

「もっと、もっと！」

由奈が笑顔でエールを送る。

「任せろ！」

その要求を翔が素直に引き受ける。

「これ以上は……」

俺は止めようとしたが、込み上げてくる吐き気が言葉の続きを言わせてくれない。

ゆっくりと動くアトラクションの中を、1つのコーヒーカップだけが異常な回転で走行する。回転速度は既に限界まで上り詰めていて、俺の五感にも支障が出てきていた。この光景を外から眺めてい

るのであれば、たぶんこう思っているだろう。ちびくろさんぼの虎のように、そのうち溶けてしまうのではないだろうか？　と。俺たちが溶けてしまったところで、何にもならないのだが……。

延々と続く長い演奏を聴きながら、終わりの見えない迷宮の中を俺たちはひたすら回り続けるのだった。

◇

「どうもありがとうございました」

従業員が頭を深く下げて、お客様への感謝を表している。

「うぅ……」
「むぅ……」
「あぅ……」

俺たちはそんな従業員に、胸の底から込み上げてくる感謝の思いで返事を返した。

コーヒーカップから降り立った俺たちは絶叫グルメを堪能し過ぎて、現在リバースの危機に陥っている。俺は制御をかけたのだが、2名ほど満腹中枢の壊れたおバカさんがいたもので、3人揃ってこの有様。今はおぼつかない足取りで、身体を休めるための場所を探していた。

コーヒーカップから少し歩いたところにベンチがあり、俺たちはその上に腰をおろした。みんな下を向いて、込み上げてくる思いを必死に我慢している。しばらく時間が経つと、回っていた視界も元通りになり、身体を襲う苦しみも少し和らいできた。

「はぁ……。ちょっと、やりすぎたぜ……」

「今頃気づいたかぁ……」

「……失敗したねぇ……」

後悔先に立たずという言葉がピッタリな俺たちは、3人仲良くため息をこぼした。これを教訓に今後の生活を送れればいいのだが、翔と由奈はきっとすぐに忘れてしまうだろう。今までずっと付き合ってきて、2人が失敗を繰り返さずに済んだことなどないのだから……。

みんなは2人の事を単純や馬鹿という言葉を使ってよく表現する。俺もその表現に間違いがあるとは思わない。しかし、俺はそんな2人を時々羨ましいと思う事がある。目の前の事に夢中になって失敗を恐れず立ち向かっていけるなんて、容易にできる芸当ではないからだ。

短所と長所は常に背中合わせ。自分勝手な翔は、自分を包み隠さずさらけ出してくれる男の子。意地っ張りな由奈は、意志を貫き通せる固い信念を持った女の子。

そんな奴らだからこそ、俺は心の底から2人を信頼できるのかもしれない。

気分が悪く頭がうまく働かない状態において、俺はそんな事を考えながら気持ちを落ち着かせていた。

「あれ？」

辛気臭い雰囲気の中、翔が突然口を開く。

「あれって……鳴海中？」

翔の視線の先に、紺のブレザーに身を包み、黄色いリボンで襟元を締めた格好の2人の女子中学生がいた。

「ホント。鳴海中の制服と同じ」

俺たちの数メートル先にいる女子中学生。彼女たちは俺たちの中学校から少し離れた場所にある別の中学校の制服とよく似た物を着ている。更にその風貌からは、同じ故郷の匂いまで漂っていた。そういえば、旅行前に先生が「最終日に、もしかすると鳴海中と一緒になるかもしれない」って言っていた気がする。まさかあの話が本当だったとは……。

「なぁ、浩介。おまえ何か知らないか？」

「確か……先生が鳴海中の奴らと同じになるかもしれないって、言っていたような……」

「マジかよ！」

「そうなんだぁ……。せっかく遠くに来ているのに身近な人とあったら、旅行気分が台無しだよぉ～」

嘆く由奈の隣で俺も、世界の狭さを感じていた。

クレープを片手に話しながら歩く2人は和気藹々（わきあいあい）としていて、遠目からでもその楽しげな雰囲気が読み取れる。全く正反対の場所にいる俺は、そんな彼女たちを羨ましく思い、ちょっとだけ嫉妬を覚えた。彼女たちには何の罪もないのだけれども。

ベンチに腰かけているだけで何もする事のない俺は、その女子中学生たちを黙って観察し始めた。

「おいしぃ～」

「ちょっと食べ過ぎじゃない？　最近体重が気になってきたって言ってなかったっけ？」

「いいの、いいの。旅行に来てる時はそんな事考えなくて」

「まあ、あんたがそういうならいいけどね」

実際に声が聞こえているわけではないが、口の動きから推測するとそんな感じだろう。

「それにしても今日は天気良くて、よかったねぇ」

「うん。……あ、そうそう。エリ、聞いた？　ここに葉山中の連中も来てるんだって」

「え？　そうなの？」

「うん……」

「ということは“葉山の双山（そうざん）”もいるの？」

「たぶん……あ！」

女子中学生の一人が足を止めて、こっちを見た。

「ねぇ、ちょっと！　あれ……そうじゃない？」

「どれぇ？」

「ほら！　あそこ！」

そう言うと、もうひとりの女の子もこっちに顔を向けてきた。

「あ、ホント！　ちょっと、どうするのよ！　ミカが変なこと言いだすから、ホントに会っちゃったじゃない！」

「私のせいじゃないわよ！」

2人は顔を引きつらせて、言い合いを始めてしまった。

――“葉山の双山”。

それは、俺と翔を指す言葉だ。

俺と翔は、地元では喧嘩の強い2人組として名が知られており、他校の生徒から恐れられている。だからといって、俺たちが不良というわけではない。

いつからか喧嘩が強いという噂が広まって、他の学校から俺たちに戦いを挑んでくる奴らが出てきた。なぜそんな噂が広まったのかはわからないが……。不純な動機で挑んでくる相手に易々この身を捧げるはずもなく、俺たちは身に降りかかる火の粉を払いのけていった。……その内、負けを知らない俺たちに無敗という言葉が生まれ、その言葉を聞きつけて、また他の連中がやってくるようになった。それを繰り返していく中で、いつしかそういうネーミングが付けられた。

山田　浩介。

北山　翔。

二つの名前に共通する“山”という字をとって“葉山の双山”。

俺たちとしては、そんな愛称を付けられて非常に迷惑している。名前だけが先を行ってしまって、気が付くと、周りから悪者扱いされていたのだから……。

言い合っている2人を黙って眺めていると、片方の女の子がこっちを振り向いて、更に表情を曇らせた。

「ちょ、ちょっとエリ！　葉山の双山がこっちを見てるわよ！」

「わ、私……目が合っちゃった！　ミカ、早く逃げよう！」

そういって2人の女子中学生は踵を返し、走り去っていった。

その光景をじっと見ていた俺は、大きく息をついて肩を落とした。

またかよ……。

いつもの事とは言え、女の子に恐れられているというのはあまり気持ちのいいものではない。顔も知らない赤の他人ではあるが、やっぱり世間の目は気になる物である。

俺は、彼女たちの居なくなったしまった場所を茫然と見つめて、物思いに更けていった。

……でも、彼女たちの会話でちょっとおかしい所があったなぁ～。目があった、って。

俺が思うに、彼女たちの目線は俺たちと少しズレていたような――

そう考えていた時、突然後ろに人の気配がした。

「やっと見つけたわよ～、この３バカ！！」

拡声器もないのに心臓を飛びあがらせるような大きな声。その怒鳴り声に、俺の体が（翔と由奈も）ビクンと痙攣を起こした。

慌てふためきながら振り返ってみると、そこに我が学校が誇る“ツインタワー”の姿があった。

「浩介！　ちゃんと待ってるように言っただろ！」

タワー１が叫ぶ。

「由奈！　あんた、あたいが言った約束忘れてたの！」

タワー２は阿修羅像のような形相で、声を荒げた。

「ごめん……拓登」

「ごめんなさい……江梨香」

俺と由奈は、深く頭を下げた。

タワー１こと、高山　拓登。１８７センチという長身で、短髪の似合う男前な少年。バスケ部キャプテンにして元生徒会長。正義感が強く、リーダーシップに長けた俺の小学校時代からの親友だ。人の話を最後まで聞いて物事を判断し、時に厳しく時にやさしくみんなを叱ってくれる、謂わばみんなの良き兄貴的存在である。

そして相方のタワー２とは、原　江梨香（はら　えりか）の事である。身長１８６センチと女の子では珍しく発達の進んだ子で、少

し釣り上がった目、尖った顎(あご)、すっと伸びた鼻筋がシャープな顔を演出し、ショートカットの髪型もまた実によく似合っている。拓登と同じくバスケ部キャプテンで、拓登同様俺の親友だ。強気な性格が魅力的で、彼女を語るには“力”という言葉を欠かす事が出来ない。権力・腕力・統治力とすべての力を兼ね揃えていて、学校で彼女に逆らおうものならその身がどうなるかわからない。それで付いたあだ名が“女帝”。この言葉を聞けば分かる通り、うちの学校における最強人物だ。まあ、普段はやさしい女の子なので、みんなからは姉貴のように慕われている。

うちの学校を治める2人を前にして、俺たちが伏せ拉(ひし)がないわけがない。まあ、こっちが悪い事をしているのだから、こういう状況になっていておかしくないのだが……。

「ったく……自分の意思を貫くのはいいけど、もっと協調性を持ってほしいよ」

「ごめん……」

「由奈、あんたも！」

「ごめんなさい……」

謝り続ける俺たちに、拓登と江梨香は呆れ顔でため息をついた。

「まあ、いいわ。あんたたちに怒っても仕方ないし」

「そうだな。……さてと――」

二人の瞳が右側へと移動する。その視線の先には、ビクビクと怯

えている翔の姿が……。

「さぁて、翔君。あたいたちが言わんとする事がわかるかな？」

「……なんとなく……」

「そう、それは良かった。もしわかってなかったら、どうしようかなって思ってたから」

「翔、下を向いてないで顔を上げろよ」

ゆっくりと顔を上げる翔。この先に待つ、今日一番のスリルへ勇敢に立ち向かっていく。

「どうも、翔君」

「……どうも」

「どうも……じゃないわよ！！」

今までやさしい口調だった江梨香が豹変した。

「翔！　あんたこれで何度目だと思ってるの！　いくら言っても聞かないし……ちょっとそこに正座しなさい！」

「は、はい！」

そう言うと翔は、ねじれていた身体を一度元に戻して江梨香の方を向き直し、ベンチの上にピシッとした姿勢で正座をした。

「翔、あんたとは小学生の時からの付き合いになるけど、どうして少しも進歩してくれないわけ？　あたいだって別に怒りたくて怒っているわけじゃないのよ。ただあんたが全然言う事を聞いてくれないから、怒ってるの！　由奈だって最近は約束を守るようになってきたし」

それを聞いて、由奈が「へへへ……」と自慢げに鼻を鳴らした。

「由奈……別に褒めてるわけじゃないから」

「ご、ごめん……」

「もう……。で、翔！　あんただけなのよ！　もうすぐ高校生なるんだから、一人前の人間として――」

母親モードになってしまった江梨香をもはや誰も止める事は出来ない。おそらく、あと１０分はこのままだろうな。

翔の説教されている姿を見ていると、なんだかこっちまで怒られている気分になってきたので、俺はそっと目線をずらした。視界が切り替わると、今まで“ツインタワー”の圧倒的なオーラにその存在がかき消されていた、２人の女の子の姿が目に飛び込んできた。

「北山君って、小学生の頃からこんな感じなの？」

「うん……そうなの。いつも江梨香ちゃんに怒られていて、たまに私や拓登君や浩介君も怒ったりするの」

江梨香の後ろでボソボソと話をしているのは、俺のクラスメイト須藤　香苗と、もう一人は学年一の美少女と言われている長瀬　美奈子（ながせ　みなこ）だ。

「そうなんだぁ……。大変なんだね？」

「うん……。でも、まさかこういう所に来てまで怒られるなんて思ってもみなかったけど」

美奈子、俺も同感だ。

隣で行われている説教を聞きながら、俺は和やかな雰囲気の２人を見て癒されていた。

……それから１０分後。

「翔、わかった？」

「はい」

音量の落ちた声を聞いて、俺はようやく説教の時間が終わった事を感じ取った。

「じゃあ、今度からはしっかりしてくれるのね？」

「はい」

「よろしい」

江梨香も怒り過ぎて疲れたのだろう。力の入っていた表情を弛めて、ホッと一息をついていた。

「でも……江梨香」

「ん？　なに？」

「協調性が重要なのは分かるけど……オレは夢に生きる自我の強い人間なんだぜ。本来ならみんなの意見を尊重しなければいけない。でも……そんなの……」

「『関係ねぇ！』って、バカじゃない！！　これだけ言ってもわからないの！　……ようし。翔とはもう少し話し合う必要があるみたいね」

「ちょ、ちょっと！　オレが言いたいのは――」

「往生際が悪いわよ、翔！」

江梨香は額に血管を浮かべながら、抑えきれない怒りをすべて吐き出していった。

ああ……翔のバカ。

また振り出しに戻ってるじゃないかよ！

その後、俺たちは翔への説教が終わるまで更に１０分待つ事となった。

4．遊園地：おとぎの国編（前書き）

今回から“（）”が出てきます。これは小さな声での会話を表しますので、その点を踏まえた上で読まれて下さい。

4．遊園地：おとぎの国編

「さてと……これからどうしようか？」

さっきまで怒鳴り散らしていた江梨香がみんなに問いかけてくる。あれだけ叫んだ後なのに息一つ切らさず、普段通りでいられるとは、さすが女帝と言ったところか……。

「なあ、江梨香。もう１２時過ぎたし、昼飯食べないか？」

腕時計に目を配らせながら、拓登が提案を出す。

「もうそんな時間なんだ。あ、でも昼ごはん食べてたら、遊ぶ時間がなくなるし……」

「江梨香ちゃん。そしたら、歩きながら食べれる物にしない？」

「それいいわね。さすが美奈子！　やっぱりあんたはしっかりしてるよ」

そういって、美奈子の頭をなでる。

「そ、そんなに髪をかき乱されたら……」

美奈子は文句を言いながらも、嬉しそうな表情をしていた。

なでる手を止めて、頭をポン、ポンと2回たたいた江梨香は、みんなの顔を窺いながら、全員の意見を聞き始めた。

「じゃあ、ファーストフードで昼食を済ませるとして、何にしよっか？」

江梨香の言葉に、約一名鋭い反応を見せる者がいた。

「私、クレープ！」

元気よく手を上げて、己の意見を主張している。いつも通り活気溢れる姿へと戻った由奈だ。

「うん。いいわね」

「俺は……お！　あそこにフランクフルト屋があるじゃんか」

「拓登はフランクフルトね。他は？」

「俺もフランクフルトで」

「じゃあ、オレも」

「はい、了解。男子はみんなフランクフルトね。美奈子と香苗は？」

江梨香は首をひねって、話し合い中の美奈子たちへと顔を向けた。視線に気づいた美奈子は、その大きな瞳をゆっくり上にあげた。

「私たちはクレープにしよう……かな？」

「りょうかい。そしたら、女子はクレープ、男子はフランクフルトで決まりね」

江梨香はみんなの意見をまとめると、クレープを買いに行くグループとフランクフルトを買いに行くグループにそれぞれ班分けし、集合場所を指定した。

昼食を買い込んだ俺たち男子グループが集合場所へ向かうと、そこにはすでにクレープを頬張る女の子たちの姿があった。

「遅かったわね？」

「待たせて悪りぃ。ちょっと込み合っててな」

リーダーである江梨香と拓登が言葉を交わす。少し会話をした後、俺たちは手に持った食べ物を口に運びながら、乗り物を求めて園内を歩き始めた。

7人組という大世帯での移動は、他の人からすれば迷惑なものだろう。そういう事をわかっているからなのか、俺たちは自然と3つの組に分かれて歩いていた。

まず先頭に美奈子と香苗がいる。この2人は歩くスピードが遅いため、前にいないとすぐに置き去りにされてしまう。まあ、そんな事を意識していたのは遠い昔の話で、今は2人が前にいる事を当たり前のように感じている。逆に2人がいないと気持ちが悪い。

それに続くのは、翔、俺、由奈の3人組。最後尾に拓登と江梨香がいる。俺たちが真ん中に陣取っているのは、前と後ろで俺たちの動向を監視させるため。拓登たちが一番後ろなのは、もちろん全員を見守るためである。一見何の意味もない並び方に見えるが、そこには色々な思考錯誤を施した痕跡が隠れているのだ。

「次は何に乗ろっかなぁ～」

隣でバニラの甘い香りを漂わせる由奈が、キョロキョロと挙動不審な態度をとっている。

「う～んと……あ、アレなんていいんじゃない？」

「アレ？」

由奈の指し示す場所に視点を移した。

「おお～、いいじゃん。何か面白そうだし」

「でしょ？」

「ちょっと待て。アレって、すごいスピードであの高さまで上昇して、そこから急降下して落ちてくる奴だろ？　ダメダメ。あんなの香苗が乗れるはずないだろ。あいつ高所恐怖症なんだから」

「えぇ～！　ダメなの？」

「たぶんな！　まあ、乗ってくれない事も無いと思うけど……香苗を半泣きさせてまで、乗りたいか？」

「う～ん。それは考えものかも……」

「はぁ～。オレたちだけなら即決だったのになぁ」

「まあ、そういうなって。他にも楽しい乗り物たくさんあるんだしさ！」

過ぎゆく様々なアトラクションを眺めながら、翔と由奈はその一つ一つに意見を述べていた。

しばらく歩いていくと、周りの雰囲気が先ほどとはだいぶ変った区域に足を踏み入れていた。巨大バルーンの中に無数のカラーボールが入っている建物、ユニークな形をした滑り台、小さな円の中を走る列車。どうやら子供向けに作られた場所らしい。

先頭の2人に舵(かじ)を任せて、おとぎの国を彷徨(うろつ)いていると、突然前の2人が錨(いかり)を落とした。

「あ、あった！」

はしゃぐ2人を目の前にして、俺は何を騒いでいるのかと不思議に思った。

「ほら！　江梨香ちゃん」

振り向いた美奈子の瞳は、眩しいほどに輝いている。

「あ～あ。そういえば“約束”してたわね」

約束？

俺・由奈・翔の頭に、はてなマークが浮かび上がった。

「ねぇ～いいでしょ？」

「はいはい。そんなに慌てなくてもいいわよ。みんなでちゃんと乗ってあげるから」

江梨香の発した言葉に、俺たちは目が飛び出るのではないかというくらい驚いた。

「ちょ、ちょっと待て！　いったい何の話だ？」

「そういえば浩介たちには教えてなかったわね。あのね、さっき美奈子たちの希望でメリーゴーランドに乗る事になったの」

「そんな話、聞いてないけど……」

「だってあんたたち、自分勝手にどっかへ行ってたんだもんね～。香苗を、置・き・去・り・に・し・て」

すごい剣幕で迫る江梨香に、背筋がゾクッとした。

「文句があるなら聞いてあげるけど？」

「い、いえ……何もございません」

俺たちは口を揃えて答えた。

「じゃ、行こうか！」

「うん！」

江梨香は美奈子と香苗の手をとって、メリーゴーランドへと駆けていく。スキップをしている美奈子と香苗。そこに、遊園地にきた仲の良い母親と2人娘の幻影が重なった。

その光景を黙って見続けていると、やさしい表情でほほ笑んでいる拓登が俺の隣にやってきた。

（拓登……どういう事だよ？）

（ん？　何が？）

（メリーゴーランドに乗るって話）

（ああ……アレなぁ……）

（何落ち着いた態度で答えてるんだよ。もっと事の重大さを考えろ。俺たちがあんなメルヘンチックな乗り物に乗車したら、他の連中はどういう風に捉えると思っているんだ。『あ、３バカ……じゃなくて……７バカァ～！？』って言うぞ！　みんな揃って恥さらしになりたいのか？）

（俺に言うなよ。俺だって反論したかったけど……美奈子の泣きそうな姿を見たら……）

（なるほど、そう言う事かぁ……）

美奈子が泣くという事は、すなわち周りから冷たい視線を注がれるという事。美奈子が一度（ひとたび）涙を流せば、周囲からむさ苦しい猛者どもが集まってきてしまう。そんな状況になったら、楽しむ段じゃなくなるよな。拓登の場合、それだけが理由じゃないが……。

（すまん、浩介）

（まあ、気にするな。お前が悪いわけじゃないから）

俺は拓登の肩に手をのせて、彼の想いに同乗した。

「何してるの？　置いて行っちゃうよ～？」

遠くで美奈子が手を振っている。俺たちは「はぁ～い」と返事を返して、みんなの待つ場所へと駆けだした。

メリーゴーランド前。俺たちはそこで立ち往生している。
視線の先にある、煌びやかな装飾を施したアトラクション。白馬と白馬に引かれる馬車とがジグザグに立ち並び、上下しながらゆっくりと回っている。そこを流れる音楽はおとぎの国にピッタリな雰囲気を持ち、聞いていると心が落ち着いて……どこか懐かしさを感じさせた。

「さぁ～みんなで乗ろ～う！」

満面の笑みを浮かべた美奈子が、手に握りしめているヤル気を空へ高々と打ち上げた。そんな彼女の姿を見て、俺は苦笑いをしている。

「うん。じゃあ、行こぉ！」

香苗もまた、浮き浮きとした気持ちを全身に表わしていた。
２人は軽やかなステップを刻みながら、先にメルヘンの世界へ入国していく。

「……あ。そうだった」

突然江梨香が声を上げる。先を行く２人は、何かを思い出した江梨香の様子が気になったのか、歩みを止めてこっちを振り向いた。

「ごめん、美奈子」

両手を合わせて謝りだす江梨香。

いったい何をしたんだ？

みんなが呆気にとられている中で、江梨香はその重い口を開いた。

「実はね、あたい……メリーゴーランドには乗れないんだ」

「え？」

江梨香の言葉に誰もが驚いた。

「なんでかってね、メリーゴーランドには身長制限があって、あたいの身長は乗れない事になってるの」

な、なに――！？

「そ、そうなんだぁ……」

いやいや。

納得するな、美奈子。

そんな事あるはずないだろ！

「それじゃあ……仕方……無いよね」

そういう美奈子は笑顔を見せていた。だが、その胸の内ではひどく落ち込んでいる事だろう。

俺はまさかの裏切り劇に怒りを通り越して、もはや呆れていた。

「ねぇ、もしかして拓登君もダメなの？」

美奈子が潤みを帯びた瞳で問いかける。

「どうやら、そう……らしい。すまん……」

メリーゴーランドに乗らなくて良いのに、拓登は複雑な面持ちで返事を返した。

一緒に乗ってくれる仲間がいきなり2人もいなくなってしまったせいで、美奈子は影のかかったような暗い表情をしている。そんな美奈子に、香苗はやさしく声をかけた。

「美奈子ちゃん、そんなに悲しまないで。あたしは一緒に乗るんだし、由奈や山田君たちだって……」

香苗がこっちに目を向ける。その鋭い眼光からは“もう誰も逃がさない”という強い意志が感じられた。ターゲットをとらえた際に見せるハンターのような目に、俺は身動き一つとれなくなった。

◇

私は今怒っている。腹の底から怒っている。理由は簡単。江梨香の言い分に納得できないからだ。爆発寸前の爆弾を抱え、いつ火薬に火が付くかわからない。そんな状態の私は、江梨香と2人きりになれる時を今か今かと待っていた。

美奈子が拓登に話しかけると、先ほどまで注目されていた江梨香から周囲の目が無くなる。私はその瞬間を見逃さなかった。江梨香の元へ駆け寄ると、手を引っ張って5人から少し離れた場所へ連れだした。

（イタッ！　そんなに手を引っ張らないでよ。何？　何なの？）

戸惑う江梨香を無視して、私は握る手へ更に力を込めた。
誰からも話声を聞かれる事がない場所へ来ると、今まで我慢していた思いを爆発させた。

「ちょっと江梨香！　どういう事なの！」

「な、何？　由奈どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないでしょ！　さっき私に言った事忘れたの！　“約束は破っちゃダメ”って言ってたじゃない」

「……。なるほど、そう言う事ね。由奈には散々言い聞かしてきたことだし、怒るのも無理ないかぁ」

「ちゃんと説明して！」

「……わかったわ」

江梨香は強張っていた頬を弛めると、落ち着いた口調で話し始めた。

「あたいは別にメリーゴーランドに乗る事が嫌で、ああいう事を言ったわけじゃないの。あたいらだけで遊園地に来ているなら、間違

いなく乗るわ。これは本当よ。ただ今回だけは、そうはいかないの……」

「なんで今回はダメなのよ」

「考えてみなさい。あたいが白馬に跨(またが)ってはしゃいでたら、あんたどう思う？」

「う～ん。……ちょっと……不気味かも」

「でしょ？　今回は学校の連中がいるの。あたいをリーダーだって思っている奴らがいるの。もしも白馬に乗ってるあたいが目撃されたら、他の連中はどう思う？」

「……」

「きっと由奈と同じように不気味に思って、気持ち悪がるわ。拓登に関しても同じ。そうなると、みんなはあたいらを謙遜するようになる。それはあたいだけじゃなくて、いつも一緒にいる由奈やみんなにも迷惑をかける事になるの。行き過ぎた考え方かもしれないけど、そうならない保証はない。わかってくれる？」

「うん……」

私は小さく頷いた。それは理解を示すためだけでなく、謝罪の気持ちも込めて。

江梨香がそんな事まで考えている事を、私は想像できなかった。ただ乗りたくないがために、自分勝手な事を言い出したのだろうと思っていた。よく考えればわかることなのに、江梨香はそんな子じゃないことくらい。友達の事をそんな風にしか見れなかったなんて

……私、なんて酷い人間なんだろう。
江梨香はそんな私に対して、やさしく接してきた。
「腑に落ちないようなら、今回はあんたも乗らなくて良いから……」
「ううん、そんな事しなくていい。私も乗る事が別に嫌なわけじゃないから」
静まった怒りに変わって、顔から笑みがこぼれる。
「そう……。ごめんね、由奈」
「謝らないで。私、楽しんでくるから」
「あたいの分もお願いね」
私は江梨香に敬礼のポーズをとった。江梨香も同じポーズをとって合わせてくる。じっと見つめ合っていると、それが妙におかしくなって、私は笑ってしまった。
笑顔になった私は、心の中が今日の空のように清々しく、どこまでも澄み渡って、すっきりとしている事に気が付いた。

5．遊園地：甘い、あま～いメルヘンの国編

メリーゴーランド前の静かな空間。
香苗の強い視線を受けた俺は身動きが取れないでいた。何か打開策はないのかと思い、助けを求めるように翔を見る。翔はピクリとも動くことなく、その場に立ち尽くしている。どうやら俺と同様の状態に陥っているようだ。
こうなったら最後の救いに頼るしかない。俺は由奈へと目を向けた。だが、先程まで隣にいたはずの由奈が忽然と姿を消している。

どこに行ったんだ？

そう思った時だった。後ろから誰かの笑い声が聞こえてくる。微かに耳をかすめた誰かの声に、俺の身体は反応した。
振り返ると、数十メートル離れた所に由奈と江梨香が立っていた。向かい合って見つめ合いながら、互いに敬礼のポーズをとっている。

……。
どういう経緯（いきさつ）でそうなるの？

俺の想像力では、２人の状況を推測する事が出来ない。いや、本当はしたくないのかもしれない。だって、軍人が向かい合って、ニヤけた顔で敬礼してたら、関わりたくないと思うだろ？　目の前に広がる光景は、まさにそんな感じなのだ。

「山田君」

「へぇ？」

謎めいた2人の行動に意識を持っていかれていた俺は、意識にない場所から飛んできた声に、マヌケな返答をしてしまった。

「山田君、いっしょに乗ってくれるよね？」

心がギュッと締め付けられるような感覚。ああ……そういえば、大事な事を忘れていた。

俺は体を反転させて、声の主と目を合わせた。

鋭く目を光らせて、重圧をかけてくる香苗。その隣で心配そうに見つめる美奈子。

無言で繰り出される攻撃が、俺の身体を打ち抜いてゆく。抵抗する術（すべ）を持っていない俺は、飛んでくる銃弾をすべて受け止めていった。たとえ対抗策を持っていたところで、敵うはずがないのだが……。

すべての攻撃をまともに受けて、俺は呆気なく白旗を上げた。

「う、うん……」

勝利をおさめた敵軍は歓喜の声を上げる。

「よかったぁ～」

「ほら、言った通りでしょ？　大丈夫だって」

全然大丈夫じゃないんですけど……。

「そうだよね。私、ちょっと卑屈になり過ぎてた」

「ダメだよ、そんな事じゃ。今から楽しもうっていうのに落ち込んでたら、楽しみが半減されちゃうよ」

「ごめんね、香苗ちゃん」

美奈子の顔に笑みが戻ってくる。勢いに乗る2人は、次のターゲットへと標準を定めだした。

「北山君も由奈も、きっと乗ってくれるから」

「うん！」

「……って、あれ？　由奈は？」

「由奈ちゃん？　そういえば、さっきから見てないような……」

美奈子と香苗が首を振って辺りを見渡す。

ちょうどその時、俺の背後から誰かが駆けてくる音が聞こえてきた。

「みなこ～、かなえ～」

2人を呼ぶ声。香苗は上半身を少し傾けて、俺の後ろ側を覗き見た。

「あ、由奈！」

香苗が軽く手を振って、俺の後ろにいる人物に応える。美奈子もまた同じように、上半身を少し傾けて、手を振っていた。

走ってきた由奈は息を切らして、肩で息をしていながら、俺の隣に並んだ。運動部で鍛えられている由奈がこんな状態になるのは非常に珍しい。余程慌ててきたのだろう。だが、表情には一切疲れを見せていない。それどころか、白い歯を見せて笑っている。

「由奈ちゃん、大丈夫？」

「え？　だ、大丈夫よ。それより、こんなところで突っ立ってて、2人とも何してるの？　メリーゴーランドに乗るんじゃないの？」

「そ、そうだけど……」

荒い息をしている由奈を、美奈子は心配そうに見つめている。

「じゃあ、早く乗ろうよ。私、乗りたくて仕方ないんだから。さっきなんて気持ちを抑えきれずに、そこら中を走り回ってたくらいだもん。モタモタしてたら……また走りだしちゃうぞぉ～」

「わわわわかったから、走ってどっかに行かないでぇ～！」

美奈子は胸元に持ってきた両手を震わせながら、慌てて由奈を止めた。そんな美奈子を見て、由奈は「冗談だよ」と嬉しそうに言った。由奈にどういう心の変化があったのかはわからない。けれど、自ら進んで乗る事を決めている。これでメリーゴーランドに乗る人数は4人に増えた。残るは……。

「さぁ～て、行きますか！　浩介も翔も、もちろん乗るわよね？」

「まあ……俺はな」

「あれ？　もしかして……翔はまだ乗る事を渋ってるの？」

何も言わずに立ち尽くしている翔に、みんなの視線が集中する。

「北山君も来てくれるよね？」

「……オレは……」

みんなの視線から逃げるように翔は俯いて、答える事を渋っている。

「なにウジウジ悩んでるのよ！」

突然割り込んできた低い声。同時に、翔の体が黒い影に覆われた。

「え、江梨香……」

翔の後ろに現れたのは、江梨香だった。

「まったく……あんたはいつもあまのじゃくなんだから」

「あまのじゃくって……」

「だってそうでしょ？　本当は乗りたくて仕方ないくせに」

江梨香がやさしく語りかける。

「そんな事は……」

「ったく。翔、正直になれよ」

焦(じ)れている翔に嫌気がさしたのか、拓登も翔の元へ近づいていく。乗らない事が決定している拓登は、きっと美奈子をこれ以上悲しませたくないのだろう。本当は一緒に乗ってあげたかったはずだから。

「翔、正直におっしゃい。本当は乗りたいんだよね？」

「……オレは……」

「もう……あんたの容姿見れば、誰だってあんたがメリーゴーランドに乗りたい事くらいわかるのよ」

「へぇ？」

江梨香の言葉が理解できない翔は、口を開けたまま、じっと江梨香の顔を眺めている。

「だって、わざわざ髪の毛を金色に染めてくるなんて、このためとしか思えないもの」

「い、いや、違うし！　これは生れつきこうなんだよ！」

「カラーコンタクトをしてくるなんてのも、普通じゃ考えられないわ」

「この青い目も生れつき！」

「みんなから王子様なんて言われてるし……」

「だから、生まれつきだって！　……え？」

江梨香の目じりがゆっくりと上がり、ニヤリと笑みを浮かべた。彼女の思惑どおり、翔は見事罠にかかった。

「生まれついての王子様が白馬に跨(またが)らず、いったい何に乗るの？」

江梨香の言葉を全員が理解した。すると由奈が、江梨香に続いて翔に声をかける。

「王子様の白馬に乗った姿……。ああ～、見てみたいなぁ」

流れの出来た場の空気に、俺たちは次から次へと言葉を流していった。

「やっぱり北山君は王子様だったんだね。あたし、一度でいいから本物の王子様に会いたかったの。でも、白馬に乗ってないと実感わかないなぁ～」

「翔王子。私は同乗できませんが、是非ともこの大観衆の前で立派な姿をお見せ下さい」

「王子は白馬に乗ってこそ、その威厳が保たれます。お供しますので、さぁ一緒に行きましょう」

俺たちの言葉に、翔の心がぐらつき始める。もう一息、といったところだろうか。

そんな翔の前にテクテクと歩み寄る美奈子。彼女は両手を胸の前に組んで、そのつぶらな瞳でとどめの一撃を刺した。

「王子様、私と一緒に乗ってくれませんか？」

美奈子のやさしい言葉が静寂の中を響き渡る。
翔は彼女の言葉を真摯(しんし)に受け止めて、迷いの吹っ切れた顔を見せた。

「よかろう！　皆の衆、その期待に応えて進ぜよう！」

胸を張って答える、勇ましい翔の姿は輝きに充ち溢れていた。
それを聞いた江梨香が、親指を立ててサインを出す。翔以外の全員は、それに頷いて答えた。

◇

王子率いる5人の軍団は、華やかな舞台への参加を長い論議の末に承諾した。
陰の立役者である江梨香と拓登は手を振り、花道を歩く俺たちを見送っている。

「しっかり楽しんできてね」

「ちゃんと見てるからな」

2人の後押しを受けて、俺は足を踏み出した。

メリーゴーランドという乗り物へ乗り込む5人。それを見守る2人の観客。もしかすると、これがメリーゴーランドを一番楽しめる形なのかもしれない。ただ馬に跨っているだけでは、左程楽しいとは思えない。余程ひょうきんな者でない限り、一人で乗る事に快楽

を得るのは難しいだろう。しかし、そこに知人から見られているという感覚が合さる事で、胸の内でうずくまっていた歓喜が爆発する。見ている方も、嬉しそうな表情を浮かべる乗客に、つられて笑みを浮かべる。乗る楽しさと見る楽しさ。二つの想いが重なるとき、みんなの顔に華が咲き誇るのだ。

王子様となった翔は一人で白馬に跨る。俺と由奈、美奈子と香苗は、それぞれ馬車に乗り込んだ。

開始のベルが鳴り響くと、馬車は上下に揺れながら、ゆっくりと進み始めた。

ゆったりとした空間に、フォークダンスに使用される事でお馴染みの『オクラホマミキサー』が流れてくる。上下する馬車の中で聞くと、いつもは感じない、曲の美しい旋律が頭の中にスッと入ってくるのだから、不思議なものだ。

前で上下に揺すられている翔は、右手を上げて、周りにいる観衆に笑顔を振りまいている。普段の翔からは想像できない姿。いつもなら「ハイヨー、シルバー！」なんて言って、安物の西部劇でも演じそうな処だが、今日はちょっと違う。天皇陛下が国民に挨拶をするように、神々しいオーラを纏っている。きっと王子様なんて言われたものだから、その気になっているのだろう。

「いいねぇ……こういうのも」

隣にいる由奈が肩を寄せてつぶやく。

「ああ……そうだな」

馬車の中は2人乗るのがやっとであるため、俺と由奈の間にほとんど隙間は無い。由奈がちょっとこっちに寄れば、身体は密着してしまう。

俺は、いつもより距離の近い場所にいる由奈に、内心ドキドキしていた。彼女から流れてくる、ほのかなバニラの香り。微かに香るという絶妙さが、俺の心をくすぐる。肩を伝って感じる由奈の体は、男のものとは明らかに違う柔らかさがあり、普段意識しない異性としての姿を率直に訴えていた。

今鏡があったとしたら、絶対覗きたくない。きっと、映し出される俺の顔は、一面赤い色に彩られていて、硬派を売りとしている俺の素顔をさらけ出してしまうのだから。

「おいおい、そこの二人。何いちゃついてるんだよ！」

「プッ……。こ、こうすけ～。何その顔？　赤くなっちゃって……表情硬いわよ」

俺たちの前方で、拓登と江梨香が楽しそうに声をかけてくる。

「へへへへ」

由奈は照れて、手混ぜを始めた。

「う、うるさい！」

俺は照れを隠すために、大きな声を吐き出した。

いちゃつくカップルにちょっかいを出す友人みたいな構図。それがとても恥ずかしくて、俺は身体を横に揺すって由奈との間に隙間を作った。しかし、由奈はその隙間を、時間をかけてゆっくり埋めてくる。気がつくと、さっきと同じように身体が密着し合う格好になっていた。

仲良く肩を並べる俺たちは、また拓登たちに冷やかされて、距離

をおいては……身体と身体が惹かれるようにまた近づいてゆく。途中、俺が近付いているのか、由奈が近付いているのか、良く分からなくなってきた。というより“人からどう見られても、別にどうでもいいや”と開き直って、肩を並べていることを恥ずかしいと思わなくなったのだ。今はこの時間を幸せに感じて、楽しむ事だけに意識を集中している。

甘い香りに包まれた馬車は、緩やかな時間を通り過ぎて、メルヘンの世界を走り続けた。

一方、前を行く翔は、2周目に入ると周りにいる子供たちから“王子様”と歓声を浴びるようになっていた。3周目には、翔も演じる事に慣れてきて、後ろ姿からでもそれらしい雰囲気を感じられるようになっていた。

そして、6周目に入ったとき、流れていた音楽が止まり、馬車は目的地へと終着した。

6．遊園地：メル……ヘン？

メルヘンの世界を十分満喫した俺は、馬車を降りると、翔の元へ駆け寄った。

「王子様、お疲れさま！」

肩をポンと叩いて翔を呼ぶ。

「ありがとう」

そう言って、翔はゆっくりと振り向いた。

翔がこっちを向いた時、俺は今までと異なる翔の姿を目撃した。

黄金の輝きを放つ髪。澄んだ色をした瞳。やさしく笑みを浮かべた表情。西洋の王子様がそこにいる。

あまりの出来事に俺は言葉を失っていた。

「どうかしたのかい？　私の顔に変なところでも？」

「……」

「黙っていてもわからないぞ、コオウスキー」

「……はぁ？」

とんでもない呼び名が飛び出してきた。コオウスキー？　それって、もしかして……俺の事なのだろうか。

「な、なぁ……翔」

「ん？」

「コオウスキーって……俺の事？」

「ハハハ。何をおかしなことを言っているんだい？　コオウスキーは君の名前じゃないか。何かおかしなものでも食べたのかい？」

おかしいのはおまえだ。

「私の知り合いに腕の立つ医者がいるから、一度見てもらうといい」

お前が見てもらえよ！

もしかすると、普段の奇行も少しは減るかもしれないぞ。

変な事になっている翔に、俺は戸惑っていた。これが意図してやっている事なのか、そうでないのか、判断が出来ないからだ。

「さて、皆さんを待たせているようだから、早く行くとしよう」

翔は華麗に馬から降りると、入口で待つみんなの元へ駆けだした。

「ちょ、ちょっと待てぇ！」

放心状態だった俺も少し遅れて、翔の後を追った。

メリーゴーランドの入口にたどり着いた翔は、突然片ひざをついて身を屈めた。

「遅れて申し訳ありません」

頭を下げて謝る翔。翔の非日常的な行動に、周りにいる5人は呆気に取られている。

「ちょっと、どうしたの？」

5人の思いを代弁して、江梨香が翔に問いかけた。

「これはこれは、エリッカ陛下。今日も美しいお姿で」

翔はさっきから続いている王子様の役で、江梨香の言葉に返事を返した。

翔の真面目なんだけど不真面目としか取れない言動に、みんなの表情が固まる。それはそうだろう。今の翔に何が起きているのかなんて、誰も理解する事が出来ないのだから。

「皆さん、大丈夫ですか？」

翔が心配そうに声をかける。どっちかと言うと、翔に言ってやりたい言葉だ。

「口を開けたまま、ぼーっとしているようですが……。まさか、5月病という病気ですか！？」

ちなみに今は11月。半年遅れでかかる病気なんて、あるはずな

いだろうが！

「せっかくの楽しい時間なのですから、そんな硬い表情をしちゃいけませんよ」

誰のせいでこうなってると思ってるんだよ！

もはや、ため息すら出てこない。

「ミナ・コーリアス姫、ユーナお嬢様、カナエールお嬢様。しっかりして下さい！」

それでも翔は懸命に、みんなに声をかけ続けていた。

遅れて駆け付けた俺は、みんなの正直なリアクションを見て、やっぱり翔が変な事になっている事を確信した。思考が固まってしまっているみんなの顔を眺めていると、我に返った江梨香と目があった。状況が呑み込めてない江梨香は、ぎこちなく手招きして、俺に“来い”とサインを出した。

（ちょっと、浩介。翔、どうしちゃったの？）

（俺に聞くなよ。俺だって、何がなんだかわからないんだから……）

（みんなの名前もおかしな事になってるし、どういう事よ！）

（ああ……あれね。実は俺もコオウスキーに改名されてた）

（はぁ？　何なの、その変な名前）

（俺に言うなよ！　勝手に決められてたんだから……）

現状を説明できない歯がゆさが、俺の心を苛立てる。イライラしていても仕方ないのだが、それでも俺はこの何とも言えない気持ちを落ち着かせる事が出来ないでいた。江梨香ならこの想いを晴らしてくれるかもしれない、そう思っていたのだが、どうやら江梨香もこの状況を整理できていないようだ。両手を組んで目を瞑（つむ）り、何やら考え事をしている。

（う～ん。もしかして……）

ゆっくり瞼を上げる江梨香を見て、何かしらの見解が出た事を俺は読み取った。

（ん？　何かわかったか、江梨香）

（あたいの勘だけどさ、さっき翔を王子様なんて言って唆（そそのか）してたじゃない？）

（ああ……）

（そのせいで、自我が保てなくなって、自分を王子様だと思いこんでしまったのかも）

（はぁ？　あいつが自我の弱い人間だって！　あり得ないぞ、そんな事。いつだって自分を主張して、自分勝手なことばかりしてるんだぞ。あいつだって自我が強い人間だとか言ってなかったっけ？）

（実は逆なのよ。本当は弱い人間なの。だから、自分を常にさらけ出しておかないといけないのよ）

江梨香の見解はとんでもないものだった。自分を保てなくなって、周りに流されてしまった？　そんなバカな事が……。しかし、そう考えざるを得ない状況である事も紛れもない真実である。

（はぁ……なんて単純なやつなんだ）

（本当に）

（あいつバカだろ？）

（そうよ、バカなのよ。あんたも知っているでしょ？）

（あ、そっか。バカだった……）

俺はため息を漏らして、今の翔を憐れんだ。

（で、これからどうする？）

（そうね……しばらく時間をおくしかないんじゃない？　まあ、変なことするのはいつもの事だし）

（だよな）

（それに、これはこれで楽しそうだしね）

（確かに）

俺は江梨香との密談により、翔のふざけた茶番につきあう事を決めた。

◇

話し合いを終えてみんなの輪に戻ってきた俺は、未だに独り舞台を演じている王子様の姿を目にした。みんなの顔を心配そうに見つめ、「大丈夫ですか？」と声をかけている。まだ西洋の世界を彷徨(さまよ)っていらっしゃるらしい。

「ユーナお嬢様、お気を確かに！」

「はぁ……」

由奈は翔の励みに応えることなく、気の抜けた声を漏らす。

あまりにも哀れな王子様に、俺は助け船を出した。

「ユーナお嬢様、ショウ王子が心配されてますよ？」

こっちを向いた由奈は、驚いたように目を見開いた。

「こ、浩介？」

由奈は俺までおかしくなったのではないかと不安げな表情を見せている。しかし、それは同時に、由奈が正気を取り戻した事を意味していた。

俺は由奈に目で合図をした。“俺にあわせろ”と。

「ユーナお嬢様、ショウ王子ですよ？」

「あ！　す、すみません……」

由奈が慌てて頭を下げる。

それを見て、王子様はやさしく微笑んだ。

「いや、いいのですよ。ユーナお嬢様には何か事情があられたのでしょう」

「いえ、そんな事は……」

「もしかして私を無視する算段だったとか？　確か前にもこういう事が……あっ！　そうか、そういう事か。なるほど……ん？　となると……うわぁ～、恥ずかしい」

突然頭を抱え出す王子様。

いったいどうしたんだ？

俺は意味のわからない王子様の行動を、ただ単純に不思議だと思った。

「王子？」

「本当に申し訳ない。いや～、まんまと騙されてました」

「何がですか？」

「またまた、そうやってお惚けになる。皆さん演技がお上手なんだから」

演じているのはおまえだろ！　なんてことは言えない。それよりも、いったい何の事を言っているかの方が気になった。俺は翔が何を考えているのか、それを口にするのを待った。

「私もまだまだ修行が足りませんでした。まさか皆さん揃って病気にかかった真似をされるとは、さすがユニークな方々だ。私がもっと早く気づいていれば、それなりの対応が出来たのに……。誠に不甲斐無い」

王子は頭を下げて、俺たちに詫びてきた。どうやら、みんなが翔の奇行に唖然としていたのを、演技だと勘違いしているらしい。ミラクルな発想だが、そう思ってくれるのであればこっちとしては助かる。

俺は王子の勘違いを肯定して話を続けた。

「王子もまだまだですね。皆さん頑張っていらっしゃったのに」

「いや、本当に……」

「謝る事はないですよ。私たちの演技がそれだけ上手だった、というだけの事なんですから」

由奈はうれしそうな顔をして、王子を慰めた。

俺たちが翔と話している間、江梨香は残りの3人に状況を説明していた。3人は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに真顔になり、江梨香の言葉に何度も頷いて聞いていた。

「お、王子様？」

話し合いを終えて状況を理解した美奈子が、ぎこちない態度で翔に声をかける。

「あ、ミナ・コーリアス姫！　先ほどはすみませんでした。演技と見抜けず、あのような返しをしてしまいまして……」

「そ、そんなぁ……。頭を上げてください」

「しかし……」

「いいのですよ。私も少しやり過ぎたと反省しています。それより、王子様の方は大丈夫ですか？」

「私……ですか？」

「ええ。体に異常はありませんか？」

「はい。もともと丈夫な体をしておりますので、どこかおかしいなどと言う事はありません」

まあ……すべてがおかしくなっている事に気づけないのだから、どこか一か所がおかしいという事はないだろう。

「そ、そうですか。元気なようでなりよりです」

「身に余るお言葉、大変うれしく思います」

王子は律義にお辞儀をして、丁重に姫への返答を行った。

その後、江梨香と香苗も王子と会話をして、王子様との付き合い方に慣れていった。最初はどうなるものかと思っていたが、今では全員が翔の茶番に楽しく参加している。

「さて、ショウとの和解も済んだことだし、そろそろ次の場所へ行こっか？」

エリッカ陛下が総意としての言葉を口にする。

「そうですね。エリッカ陛下のおっしゃる通り、今から新天地を目指して旅を続けましょう！」

翔の中での俺たちは、新たな土地を探して旅を続ける一行らしい。詳しい事は知らないが、最近隣国が勢力を拡大しており、それに肖（あやか）って俺たちも新しい領土を探しているそうだ。

カナエールお嬢様とミナ・コーリアス姫が先陣を切って進む。お姫様が危険を顧みず先を行くという普通じゃありえない陣形で、俺たちは新天地を目指して足を踏み出した。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

全員が身体を前屈みにして先を急ごうとしている中で、最後尾にいる拓登がみんなを呼びとめた。

「あのさ、ちょっと確認なんだけど……」

いつもの威勢の良さが感じられない拓登が、口ごもりながら声をかけてくる。

「しょ、翔。俺の事……覚えているか？」

その言葉を聞いて、俺はある事に気づいた。そういえば、まだ拓登だけが翔と会話していない、と。拓登以外の全員は、変な呼び名であったが、一応翔から名前を呼ばれている。そして、二言三言、言葉も交わしている。しかし拓登は話をするどころか、名前さえ呼ばれていない。拓登が弱気になっているのは、きっとそのせいだ。もしかすると、自分の事だけ忘れられているのではないか、そう考えているのだろう。

弱々しくなっている拓登に、王子は戸惑いながら返事をした。

「えっ……と、確か……」

王子は首を傾げながら拓登の顔をまじまじと見ている。どうやら思い出すのに時間がかかっているようだ。

しばらく悩みぬいた後、王子は手と手をポンと打ち合わせて、“閃いた”と言わんばかりの古臭いジェスチャーをとった。

「あっ！　思い出した！」

王子の顔が明るくなる。それを見て、不安げな顔をしていた拓登の表情も明るくなった。

「俺の事、知っているのか？」

「ああ、忘れるはずがない。君はタクトだ！」

翔が発した“タクト”という言葉。それを聞いて、全員が翔の方に顔を向けた。みんなの顔は、嬉しい事があった時に見せる笑顔よりも眩しく輝く希望に充ち溢れた顔をしている。今までどこかの世界に旅立っていた翔が、ついに現代に帰ってきた！　その事が何よ

りも嬉しくて堪らないといった感じだ。今までの翔も十分いい奴だったが、やっぱり元の翔の方が何倍もいい奴だ。みんなもそう思っている事だろう。

「しょ、翔……。やっと戻ってきたんだな」

拓登が感動のあまり涙を浮かべる。

「すまない、タクト。君の名前をすぐに思い出せなくて……」

「いや、いいんだ」

「良くないぞ。忘れかけていたんだから。そうだ……君の名前はタクト！　タクト・アバンスキュール・ロマネス・ハルク・ミルフィーユ２００８世だ！」

「……え？」

一瞬垣間見た希望は、見事なまでに粉砕した。

な、なに？　タクト・アバンスキュール・ロマネスなんとかって。それって……名前？

おいおい、今までそんな名前出してなかったじゃないか。

なんだよ、その長ったらしい名前は！？

しかも、２００８世って……歴史長いよ！　どんだけぇ～！？

はぁ……せめて長いのは身長だけにしといてやれよ！

拓登の目から涙は消え失せ、その代り、どうすればいいのかわからない雰囲気だけが残っていた。

結局、翔が現代に戻ってくるまでに約３０分がかかった。
ちゃんと戻ってきてくれた事は喜ばしいのだが、長いタイムトラベルをしたせいか正気に戻った翔は今までの事を何一つ覚えていなかった。そんな翔に俺は言った、「おかえり」と。

「ただいま……じゃなくて、オレはいったい何してたんだ？」

「さぁな。まあ、思い出さなくてもいいじゃないか」

「良くねぇよ！　なぁ、教えてくれ！」

「思い出さなくてもいい事はあるんだぞ」

「そんな事言われると、余計知りたくなる」

「そう言われてもなぁ～」

「頼むよ、コオウスキー」

「……」

えっ……と。
これって、時差ボケ？

7．遊園地：俺×翔×拓登＝男組　編

あの後、時差ボケが解消された翔にようやく心をなでおろした俺たちは、美奈子や香苗でも乗れるファミリー向けのアトラクションを巡り回って楽しんだ。その時、修学旅行専属のカメラマンに何枚か写真を撮られたりした。その写真が後日ある伝説を築くことになるのは、また別の話だが……。

7人で過ごす時間はとても愉快で、残りの時間が後どれくらいあるのかなんて、忘れてしまうほどだった。だから江梨香が「もうそろそろお土産でも買いに行こうか」なんて言い出した時は“もうすこし遊んでいたいのに”と心なしか、物足りなさを感じた。

「よぉ～し、お土産を買いに行きますか。ショッピングの時間は1時間。しっかり品定めして、必要なモノだけ買うんだよ！　特に……翔！　あんたは良くも考えないで買い物するから、じっくり時間を使いなさい」

「そんな事言われなくてもわかっているよ」

「フフフ。じゃあ、初めは女の子は女の子同士、男の子は男の子同士に分かれて行動しましょ」

江梨香の号令により、俺たちは二手に分かれた。

俺たち男組がまず向かったのは、装飾品を扱うお店だった。店内にはネックレスやブレスレットなどのシルバーアクセサリーが陳列している。せっかく旅行に来ているのに、こんな場所でお土産を買

う事はないだろう、なんて思うかもしれない。だが、俺たちの選択は決して間違っていない。なぜかって？　そりゃあ、お土産を買うのに設けられた1時間という長い時間を、単純にお土産のために費やすなんて出来ないからだ。

男という生き物はショッピングに左程時間がかからない。それは男がせっかち、というわけではない。男は買い物をする際、ある程度自分の中で良いと思えるものがあれば、それを迷わず買ってしまう。他にもっと良いものがあるかもしれないのに、それを探そうとはしない。要するに“面倒くさがり”なのだ。

一方女性は、ショッピングに多大な時間をかける。それは、女性が色々な物を見回った後に、一番良いと思える物を買うからだ。女はとても慎重な生き物。そう考えると、男が『単純』なんて言われるのも頷ける。女性向けの洋服が男のものよりも多いのは、単に女性の美意識が男よりも強いからだけではなく、そういう部分が関わっているのかもしれない。家計を女性が担うのも、女性が買い物をするのが上手いからだろう。

色々と述べてきたが、俺が言いたいのはただ一つ。俺たちが1時間を有効に使うには、興味の赴くままに行動すべきだという事だ。

店内に入った俺たちは、各自気に入るアクセサリーを持ち合わせて、姿見の前でファッションショーを行っていた。

「今回のファッション、テーマはちょい不良。男の中に潜むワイルドな感じを表現してみました」

翔がドクロのアクセサリーを身につけて、鏡の前でモデルを演じる。

傍らに立つ俺と拓登は、その衣装について批評をしていた。

「え～と、拓登さん。今回の翔君はいかがでしょうか？」

「そうですねぇ。黒の学ランにシルバーのアクセサリーがマッチしていて、いいと思います」

「なるほど」

「ですが、ちょっとドクロが大き過ぎるのではないでしょうか？」

「やはりそうですか。私も思いましたが、頭に被っているドクロはちょっとマイナスですね。いや、それよりも……どこからあんなの見つけてきたんだ！？」

「ストーップ！　浩介、口調が普通に戻っている」

「あっ！　わりぃ……」

「今はファッション評論家なんだから、ちゃんとなり切ってもらわないと」

「あのな、翔。そう言うなら、おまえももっとモデルらしい恰好をしろよ。そうじゃないと、いつもの調子に戻っちまうだろ！」

「そこは浩介の力量。自分の失敗を人のせいにするなよ」

「なんだとぉ～」

「まぁまぁ、落ち着けよ。翔の悪ふざけなんていつもの事じゃないか。いちいち気にしてたら、ストレスたまるぞ。そのうち、ハゲた

りして……」

「おお～、そんな浩介にピッタリじゃないか、コレ。ハゲた頭を恥ずかしいと思う時は隠すために、恥じらいなんて捨てて輝きを求める時もコレでＯＫ！　コレ、おまえのためにあるのかも」

「アホ！　おまえに将来を案じられたくないわ！　心配してくれるなら、もう少し大人しくなりやがれ」

「浩介はんは怖いですなぁ～」

「なに京都っぽくしゃべろうとしてるんだよ！」

「はいはい、そこまで。じゃあ次に行こう、次に」

拓登が場を取り締まって、俺たちは次のお店へと向かった。

続いてやってきたのは、インテリアルな小物を扱ったお店。ここでは宇宙人のぬいぐるみや宇宙船の模型などが並べられている。

先陣を切って入店した翔は、入口付近で立ち止まっていた。

「いよいよ、決戦の時が来た……。さあ来い、エイリアン！」

店に入って早々、翔が巨大な宇宙人のレプリカを相手にファイティングポーズをとっている。周りにいるお客さんは、いったい何が始まったのかと興味を寄せていた。

「翔、何してんだ？」

「浩介、こいつを見ろ！　地球侵略を狙うエイリアンだぞ！」

「あっそ」

「だが安心しろ。最強であるオレが、返り討ちにしてやるぜ！　どっちが上かをここで証明してやる！」

「そっか、わかった。じゃあ、どっちが最強の単細胞生物か、納得のできるまで戦え」

「よし、浩介の承諾も降りた。エイリアンよ、いざ尋常に勝負！！」

今世紀最大のバトルが、今ここで火ぶたを切った。

地球代表の翔は、両手で自分の頬を引っ張り、宇宙代表のエイリアンに先制攻撃をかます。しかし、エイリアンはピクリとも動かない。翔の攻撃にビクともしていないようだ。

「むぅ～」

ポーカーフェイスのエイリアンに戸惑う翔。だが、そんな事じゃ挫けないのが、翔の強みである。

翔は攻める手法を変更して、更なる攻撃を仕掛けた。下唇を前に出し、両耳を引っ張って目を瞑る。

こ、これはまさか……。

翔の奥義『金色の髪を持つサル野郎』！？

説明しよう。『金色の髪を持つサル野郎』とは、某マンガを模範して、翔が生み出した最強の技だ。見た目はアホ丸出しの姿だが（実際にアホだが）、そこに隠されている力は相当なものだ。そのパ

ワーは通常時でさえ測る事が出来ず、感情の起伏によって更に大きく変化してしまう。
切り札を出してしまうとは、これで勝敗を決するつもりらしい。
宇宙人　対　サル野郎。ナメッ〇星での大一番を思い出させる光景だ。

「むむむむ……」

気を集中して攻撃を繰り出す翔。しかし、エイリアンは表情を崩さない。

「むむむむ……」

翔の顔に焦りが見える。まさか……この技でも無理なのか？
数分に及ぶ激闘の末、ついに翔は力尽きた。

「はぁ、はぁ、はぁ……。くそ、おまえが最強だ」

口惜しそうに翔が言葉を吐き捨てる。
俺はそんな翔の肩に手をのせて、落ち込む翔に檄（げき）を飛ばした。

「そんな事はない。宇宙（もけい）人と睨めっこして、ここまで渡り合えるおまえは勇敢だ。おまえこそが世界一……いや、宇宙一（のバカ）だ！」

「浩介……」

「翔……」

そして俺たちは熱く抱擁を交わした。

周りで見ていた人々は、エイリアンと渡り合った翔とその友に、心からの言葉をかけてくれた。

「ゆうきちゃん、見ちゃダメ――！！」

胸の奥へ突き刺さるようなセリフ。飛んできた方向には、小さな子供の目を必死に隠そうとする母親の姿があった。

「なんでぇ～？」

「あの人たちはちょっと……いや、すんごく頭の悪い人たちなの。ゆうきちゃんも頭が悪くなりたいの？」

「ううん」

「じゃあ、ゆうきちゃんはあんな大人にならないようにしないとね」

「うん。僕、バカにはならない！」

子供からの冷たいコメント。そして冷やかな観衆の視線を受けて、俺たちは引き際を感じた。

「さて、次に……」

仲間であるはずの拓登は、我関せずといった態度で先に店を出ていった。

う、裏切り者！？

俺たちも踵を返して、すぐさま店から逃げ出した。

その後、３０分あちこちを見回った挙句、俺たちは何一つお土産を買わなかった。結局、女性陣が最初に行こうと言っていた、お菓子や遊園地のキャラクターグッズが集う一番無難なお店に、俺たちも向かう事となった。

8．遊園地：二つの記念キーホルダー編

赤や黄色の明るい色が、店内を華やかに演出している。設置されたテーブルの上には、山積みに積まれた洋菓子と試食用のケースが並べられており、通りかかる者の視線を釘付けにしていた。

周りを見渡せば、俺たちと同じようにお土産を買いにきた同級生たちがそこら中を歩き回っている。残り３０分という時間が、みんなをここに呼び集めているらしい。

俺たちは行き交う人々の合間を縫って、先ほど別れた女性陣を探していた。入口から店内を観察していると、キャラクターグッズが集められた空間に一際目立つ女の子の姿を見つけた。そう、江梨香である。江梨香は人波に飲み込まれることなく、その姿を存分に主張している。長身というのはこういう時に役に立つ。俺たちは江梨香を目印にして、女性陣の居る場所へと歩み寄っていった。

「あれ？　浩介どうしたの？」

右手に大きな包みを抱えた由奈が、気配を感じとってかこっちを振り向いた。

「よう！」

「うぃ～す！」

歩み寄る俺と翔は右手を上げて、由奈に挨拶をした。

「あ！　拓登君たちもこっちに来てたんだ」

「ああ、今さっき着いたばかりだけどな」

「高山君、北山君は大丈夫だった？」

「ああ、問題なし！　大人しくしてたよ」

美奈子と香苗も俺たちの事を歓迎してくれている。

しかし、江梨香は別だった。俺たちの姿をまじまじと観察して、少し表情を曇らせている。

「ん？　あんたたち……まだ何も買ってないじゃない！」

「まあ、色々見回ってたんだけど、買いたい物が見つからないくて。だから、ここに来たんだけどな」

「拓登、だからここに来なさいって言ったでしょ？　せっかく1時間も買い物する時間があったのに、無駄な事ばっかりするんだから」

江梨香は手に掲げた大きな袋を見せて、必要なモノはもう買ったとアピールをしていた。

「まぁまぁ、そう言うなよ。あと30分もあれば、十分買い物できるんだからさ」

拓登は江梨香の機嫌を損なわないように、やわらかい口調で対応する。

「あんたらが素直に買い物するはずがないとは思っていたけど、まさかここまで予想通りに行動してくれるとは……。はぁ～、仕方ないわ。あたいたちが手伝ってあげる」

江梨香と同じように、美奈子や香苗も袋をぶら下げている。唯一袋を持っていない由奈も、手にお土産を掲げており、すでに買う物が決まっているようだ。
俺たちは女の子たちの気持ちを素直に受け止めて、一緒にお土産を探してもらう事にした。

◇

買い物ができていない男性陣を手伝う形となった私たち。男の子って、どうしていつも要領が悪いんだろう……と私は思う。
確かに買い物するのに1時間という時間は必要ないかもしれない。けど、残りの時間が短くなると、混雑するのは目に見えている。わざわざ人の多い時に買い物をしなくて済むよう江梨香が工面してくれたのに、浩介たちは何もわかっていなかった。
だけど、一緒になって買い物している時間はとても楽しい。ホントはこれで良かったのかも……と思えてきた。

私たちが色々とアドバイスをしたおかげか、あっと言う間に男の子のショッピングは終了した。時間にして約10分。忠実に私たちの意見を聞き入れてくれた結果、お土産は私たちが買ったものと同じものになった。

残った20分は、各自好きなように使う事となった。
今私は、浩介、翔、江梨香の4人で自分たち用のお土産を探している。

「由奈」

私の肩に誰かの手が触れた。振り返ると、そこに微笑みを浮かべている江梨香の姿があった。

「なに？」

私は江梨香の目を見ながら、私を呼んだ理由を問いかけた。

「由奈、このままでいいの？」

不敵に笑みを浮かべる江梨香は、私に何かを訴えている。

「このままでいいってどうゆう事？」

「だから……」

そういって江梨香は私の耳元に顔を寄せて、小さな声で囁いてきた。

（このまま修学旅行を終えてもいいのかなって）

（だから、どういう意味？）

（浩介と2人きりにならなくて良かったのかなって事よ）

（……えっ！？）

江梨香の言葉に動揺した心が、私の顔にその気持ちを表そうとする。

（いつも翔がいるから、2人になれる時がなかったんじゃない？）
（ちょ、ちょっと、何言い出すの？　どうして浩介と2人きりにならなくちゃいけないのよ！）
（そんなムキにならなくても……）
（ム、ムキになんて、な、なってないわよ！）
（はぁ……。あんたって本当にわかりやすいんだから……）
（な、何が？）
（もう惚（とぼ）けなくていいわよ。あたいは全部わかってるから）
（……）

いきなり変な事を言い出してきた江梨香を、私は無言で見つめ続けた。

（由奈）
（な、なに？）
（あ・そ・こ）

江梨香は拓登たちを指さして、私に“見ろ”と指示をした。
楽しそうにショッピングしている拓登たち。それを見た私は、江梨香が何を言おうとしているのかわからない。

（拓登たちがどうかしたの？）

（あいつ、あたいが『自由に行動していい』って言ったら、すぐに美奈子たちの所に行ったわ）

別に拓登が誰と行動しようが、それは彼の勝手である。その事が私とどう関係あるのか、私は益々わからなくなった。

（それがどうかしたの？）

（あんたもあいつと同じように、素直に行動できたらいいのにね）

（だから、それがどうかしたのよ！）

（……あんたさ……）

真面目な顔で見つめてくる江梨香。強気な彼女の視線が、私の心を追い詰めていく。逃げ場のない私は顔を引きつらせて、江梨香の放つ重圧に必死で抵抗していた。

（あんたさ……）

（な、なによ）

（浩介の事……好きでしょ）

（……え！？）

心臓の鼓動が高鳴りを見せる。突如乱れた脈に驚いた身体が、一瞬動作を忘れる。開けられたままの口はそのせいで、なかなか閉め

る事ができなかった。
時間をかけて口を閉ざすと、ようやく身体に動きが戻ってくる。
だが、依然として心臓の鼓動は激しさを保っていた。
これじゃあ“浩介の事を好きですよ”と言っているようなものじゃない！
何か反論をしないと……。
私は動揺している自分を振り払うように、慌てて言葉を返した。
「わ、わ、私が、こ、浩介のこ、事をす、す、好き？」
慌てて答えたせいで、言葉が上手く言えない。しかも、語尾が上ずっている。
それを見て、江梨香がクスクスと笑い声を上げた。
（由奈、動揺し過ぎ。そんな大きな声を出したら、聞かれちゃうよ）
（……）
（あんたって本当、わかりやすいわよね～？　絵に描いたように赤くなるんだもん）
私は江梨香から逃げるように顔をそむけた。
（ごめん、ごめん。そんなむくれた顔をしないで）
（むぅ～）
（そんな顔してたら、浩介の事好きだって肯定しているみたいだよ）

（……）

（まあ、いいわ。あたいの思い違いって事で。それじゃあ、あたいが翔を連れていくから、後は由奈が好きなようにしなさい。せっかくの旅行なんだから、何か思い出に残るものでも買ってもらうのよ）

（え！？　ちょ、ちょっと！）

江梨香は私の言葉に耳を傾けることなく、翔の元へと駆けて行った。

◇

「ん～ん」

俺はある商品を眺めて唸っていた。俺が眺めている物。それは、この遊園地のマスコットキャラクターである何かの動物（たぶん男の子だと思うが）が模（かたど）られたキーホルダーである。

実はこの旅行の中で俺は、自分用のお土産を買っていない。一生に一度の出来事を思い出として残す物を持っていないのだ。旅先で色々なお土産があったが、俺はそれに手を伸ばすことができなかった。“その内買えればいいや”なんて思っていたら、いつになっても買う事が出来ず、気づけば今の今まで買う事が出来ないでいた。

俺は真剣な表情で商品を見つめながら、隣にいる翔に意見を求めた。

「なあ、どれがいいと思う？」

しかし、返事が返ってこない。もしかして聞いてないのか？　そう思った俺は、同じ言葉を繰り返した。

「なあ、翔。どれがいいと思う？」

やっぱり返事が返ってこない。おかしいなぁと思う俺に、別の声が返事を返してきた。

「翔ならいないよ」

「え？」

振り返ってみると、そこには先ほどまでいた筈の翔に代わって由奈が一人で立っていた。

「あれ？　翔は？」

「浩介が一人夢中になっている間に、江梨香に連れていかれちゃったわよ」

狭くなっていた視野を広げてみると、少し離れた所に翔と江梨香がいた。更に離れた所には拓登と美奈子と香苗もいる。いつの間にかみんなバラバラになっていたようだ。

「浩介。そんなに夢中になって、何を見てたの？」

「ん？　ああ、これかぁ？」

俺の体のせいでテーブルが隠れていたらしい。由奈にも見えるように、俺はそっと立ち位置をずらした。

「なになに？」

興味深そうな表情で近づいてくる由奈。テーブルの前まで来ると、珍しいものでも見つけたような顔をして弾んだ声を上げた。

「あ、キーホルダー！」

「そう。旅行の記念に買おうかな、なんて思ってたんだ」

「へぇ～、意外に可愛いのもあるだぁ」

由奈はキーホルダーを拾い上げると、目を輝かせながらそれを見つめていた。

「あ、それいいよな。俺もそれを買おうと思ってたんだ」

「そうなの？」

「ああ」

由奈が手に持っているのは、キャラクターの全身が模られたキーホルダー。テーブルの上には、他にも顔だけを拡大したモノやロゴの入ったモノなんかもある。だがそれらよりもこのキーホルダーの方が、見た目の印象はよかった。

「ふ～ん」

由奈は鼻を鳴らしながら、手元にあるキーホルダーを観察している。

「由奈も買うのか？」

「ん？」

手元から目線を外して、由奈がこっちを向く。

「俺は買うつもりだけど、どうする？」

「え……と……」

由奈は言葉を詰まらせながら、何か考え事をしているようだ。

（ホントは浩介に買ってもらいたいけど……）

由奈の口が微かに動いた。

「ん？　何か言ったか？」

「え？　ううん、何も言ってないよ」

「そうかぁ？　まあいいや。で、どうする？」

「う～ん。欲しいのは、欲しいんだけど……」

「もしかしてお金がないとか？」

「え？」

「やっぱりそうか。そう言う事なら貸しやるぞ！」

俺は由奈を思って、そう言葉を投げかけた。

「いや……そういうわけじゃ……」

だが、由奈はハッキリとしない態度でモジモジしている。

残りの時間も少なくなってきて、もうそろそろレジへ行かないと間に合わない。そう思った俺は、由奈にこう提案した。

「わかった。それじゃあ、俺が由奈の分も一緒に買ってやるよ！」

「え？」

「これを2つと……。由奈もこれでいいんだろ？」

2つのキーホルダーを掲げて、由奈に確認する。

「え……と、ちょっと待って。それなら私こっちにする！」

由奈が慌てて手に取ったのは、さっきのキャラクターと同じ格好をした女の子の方のキーホルダーだった。逞しい印象を受ける男の子に比べて、女の子の方は少し弱々しい感じがする。だけど、そこが何とも可愛らしくて、守ってやりたいと思わせた。

俺は由奈からキーホルダーを受け取ると、すぐさまレジへと向かった。由奈も俺の後をくっ付くようにして、一緒にレジまでついてきた。レジに出来た長蛇の列に参列した俺たちは、順番が早く回ってくる事を願った。

前のお客さんの会計が終わり、いよいよ俺たちの番が回ってくる。
レジの前に立った俺は、手に持った2つのキーホルダーを店員に向って差し出した。

「あ、浩介。ちょっと待って！」

由奈が俺の伸ばした手を慌てて引っ張る。

「何だよ。もしかして他のモノの方が良かった、なんて言うんじゃないだろうな？　言っとくけど、後ろに並んでいる人がいるんだから、そんな暇はないぞ」

「ううん。そうじゃなくて、浩介が持っている男の子のキーホルダーは私が買う！」

「はぁ～？」

いきなり何を言い出すかと思えば、キーホルダーを自分で買う？
おまえ、お金がなかったんじゃなかったのかよ。

俺は不自然な行動をとる由奈に戸惑った。

「あの、お客様。後ろがつかえてますので……」

店員の注意を受けて、俺は慌ててキーホルダーを差し出そうとする。

「ああ、待ってって！」

だけど、由奈が俺の手を強引に引っ張って、商品の会計を行わせようとしない。このままじゃどうしようもないと思った俺は、仕方なく由奈に片方のキーホルダーを手渡した。

「へへへへ」

キーホルダーを手に持った由奈は、笑みを浮かべていた。
状況がよく掴めていない俺は、結局女の子の方のキーホルダーを買う事となった。

会計が済んだ後、俺は由奈にさっきの事について問い詰めた。

「おい、由奈！　そっちの方がよかったんなら、初めからそう言えばいいだろ？　しかも、自分で買うなんて突然言い出しやがって……さっき悩んでいたのは、いったい――」

「はい」

俺が説教をしている途中で、由奈がさっき買ったキーホルダーの包みを俺の方に差し出してきた。

「な、何だよ」

「プレゼント」

大事な物を渡すように両手でしっかりと握られたキーホルダーの包み。由奈は俺の目を見ながら、それを受け取るよう訴えている。
何が何だかわからない俺は、とりあえずその包みを受け取った。

「あ、ありがとう……」

「へへへへ」

プレゼントを渡し終えた由奈は満足そうに微笑んでいた。
お土産を受け取った俺は、よくわからない状況に依然戸惑っている。この後どう行動すればいいのかさえ、判断する事ができない。とりあえず、この場を立ち去ろうと思い身体を翻そうとした。だけど、由奈がまだ何かあるような目でこっちをずっと見ている。

あっ！

俺は自分の手に持っているもう一つの包みに目を向けた。由奈が俺に買ったお土産をプレゼントしたという事は、どうやら俺もこれを渡さないといけないらしい。

なるほどそういうことか……。

俺は由奈が取った行動の意味を、その時になって初めて理解した。

「ゆ、由奈。ほら、これ……」

誕生日でもないのプレゼントをする。それが妙に恥ずかしい。
俺は由奈と視線を合わせないようにして、包みをそっと差し出した。

「あ、ありがとう！」

嬉しそうな声を上げて、由奈はそれを受け取った。
横目で彼女の顔を確認すると、満面の笑みを浮かべている姿が目

に映る。なんとなく照れくさい気分になった俺は、由奈から受け取った包みをポケットにしまいこんでその場から逃げるように背を向けた。

「修学旅行のいい記念が出来たね！」

俺の少し後ろから由奈が声をかけてくる。

「……まぁ、そうだな」

まだ恥ずかしさの抜けない俺は、ぶっきら棒な態度で由奈に返事を返した。

ひた向きに前を行く俺の隣に由奈が早足で並んでくる。茶色い髪の下に見せる由奈の表情は、俺が見てきたどの笑顔よりも眩しく、太陽のように輝いていた。

俺のポケットに入ったもう一つのキーホルダー。初めは自分で買おうとしていた記念の品。今その包みはポケットの中で、優しい温もりを発している。由奈からプレゼントされた事で、少し重みが変わったようだ。自分の為だけに買うのと人からもらうのとでは、記念の品の意味も少し変わってくる。俺一人で思い出を持つのではなく、由奈と共有して思い出を持つという事になるのだから。

「へへへへ」

隣で笑顔を振りまく由奈を見ていると、俺もつられて笑みがこぼれてきた。

2人だけの思い出かぁ……。

それも悪くないかもな。

俺はポケットに手を突っ込んで、密かに包みを握りしめた。
包みから伝わってくるやさしい温もりが俺の身体へと流れてくる。
心地よい温もりに触れて俺は、心が温まっていくような……そんな気がした。

9．思い出を胸に

自由時間を終えた俺たちは、遊園地で過ごした楽しい思い出を持って、一同バスへと乗り込んだ。疲れのたまった身体を指定の座席に下ろすと、余計な力が抜けおちていき、体全身が安堵の雰囲気に包まれていく。力の入らない体に代わって、頭の中がいつも以上に機能しているように感じた。俺は唯一機能している頭をフル稼働して、心にしまった荷物を広げ、ゆっくりと脳裏に並べていった……。

『約束を忘れて巡ったグルメツアー』

コーヒーに酔わされて、拓登と江梨香に酔いを覚まされたっけ。

『食べ歩きながら訪れたおとぎの国』

翔だけが別の国に飛び立ってしまったんだよな。

『7人で回ったアトラクション』

美奈子と香苗の笑顔に誘われて、みんなが笑顔になれたんだ。

『最後の最後の……お土産探し』

家族宛てのお土産を買い込んで、更に特別な思い出も持つ事ができた。

俺は鮮明に蘇る風景を、心のアルバムにそっと仕舞い込んだ。一つ一つの写真にコメントを添えて、その記憶が色あせてもまた思い出せるように。

すべての写真を仕舞い込むと、俺はアルバムを閉じるようにそっと瞼を閉じた。

バスに乗って数分後、クラスの生徒全員が着席を済ませた。

「みんな乗ったか？」

バスの乗り口付近から吉田先生が確認を取る。

「大丈夫で～す」

俺たち生徒は周りを確認して、声を揃えて応答した。

「みんな、お疲れさま。遊びまわってだいぶ疲れているだろう。後は寄るところもないから、帰るまでの時間を身体を休めるのにあてててくれ。明日からまた学校だから、疲れがたまって休みますなんて言うなよ！　じゃあ、出発するぞぉ？　いいな？」

吉田先生の言葉を受けて、俺たちは「はい！」とだけ返事をした。

故郷に向けて走る続ける俺たち。

何もする事のないバスの中では、みんな溜まった疲れのためにお休みモード……という事にはならなかった。遊園地から続いているテンションのままバスに乗っているのだから、簡単に眠れるはずがない。

周りでは遊園地での出来事を話題にして、話に花を咲かせている。ひそひそと聞こえてくる話声。それが集まったところで五月蠅くはならない。吉田先生もこんな状況じゃ、「静かにしろ！」なんて言えないだろう。

「なぁ、浩介」

「ん？」

隣で退屈そうな顔をした翔が、俺に声をかけてくる。

「翔、どうしたんだ？」

「何かする事ないかぁ？」

「う～ん。思い浮かばねぇな」

「そっか」

「そういう翔は何かないのか？」

「それが何も……。人生ゲームとトランプならあるが……」

「アウトだな。そういうのをする体力はない」

「だよな……」

俺と翔は手持無沙汰になった。こういう時にできるモノが浮かんでこない。

翔と2人ではこの状況を打開できないと思った俺は、前にいる2人に意見を求めた。

「由奈、何かしないか？」

「ん？　何かって何を？」

「それがまだ決まってないんだけど」

「そうねぇ～。う～んと……」

腕を組んで頭を働かせる由奈。必死に考えている様子からして、いいアイディアが出てくるのは絶望的かもしれない。

「ねぇ、山田君」

由奈の隣で話を聞いていた香苗が、艶やかな黒髪を揺らして、こっちを振り向いた。

「したい事って、どんな事？」

「そうだな……。頭だけで出来る簡単な遊びみたいなモノ？」

なぜか俺は疑問形で答えてしまった。

「う～ん。それじゃあさ、クイズみたいな感じでいいわけ？」

「まぁ、そんな感じかな」

曖昧なイメージしかなかった俺は、香苗の考えを肯定した。

「それなら、いいのがあるよ」

「本当か！」

「うん」

香苗の自信たっぷりな表情に、俺はついつい身を乗り出してしまった。成績優秀の香苗が考えたクイズとあれば、それはきっと難し

いものに違いない。俺は香苗の意見をそのまま採用する事にした。
やる事が決定したので、隣で目を瞑りひたすら悩んでいる由奈にその事を報告する。

「おい、由奈。もう考えなくて良いぞ」

「え？」

由奈は不意を突かれたみたいで、マヌケな面を俺の方に向けた。

「香苗にいい案があるらしいから、それをする事に決まった」

「そうなの？」

「せっかく考えてくれてたのに……ごめんね、由奈」

「いや、別にいい考えも浮かばなかったし、香苗に何かいい案があるならそれにしようよ」

「ありがとう、由奈」

「だから、お礼を言われるような事じゃないないから……」

謙虚な姿勢を貫く香苗に、由奈はしばし戸惑っていた。

翔にも事情を説明し、俺たちは香苗が考案するクイズに挑むことになった。

「じゃあ、始めるね。まずはあたしの話に耳を傾けてください」

神妙な面持ちで語り出す香苗に、俺たちの視線が集中する。彼女の口が行う動作を一つ一つ正確に捉え、言葉一つ聞き逃さないように準備を整えた。

「これは、とある町で起きた事件の話です――」

そして、物語は語られていった……。

これは四つ角殺人事件です。

名前から想像できるように、ある交差点で事件は起こりました。

東西南北に枝分かれした交差点。それは平穏なイメージの強い町にありました。

交差点の北東には建設中のマンションがありました。予定では２０階建てになるそうです。

交差点の北西には花屋さんがありました。そこは５０年前から続いている、地元の人なら誰もが知っているお店です。

交差点の南東には最近オープンしたばかりの喫茶店がありました。この町にはそういうお店が無かったこともあって、連日お客さんが絶えなかったそうです。

そして、交差点の南西には7階建てのビルがありました。色々と悪いうわさの絶えないビルで、そこに足を踏み入れる人は滅多にいなかったそうです。

そんなどこにでもある交差点で、ある日女性の死体が発見されました。

彼女は喫茶店でウエイトレスのアルバイトをしていた女性でした。

平穏な町に起こった不吉な出来事。当然警察も捜査に乗り出しました。

一見すぐに解決されると思われた事件。しかし、この事件は意外にも難航する事に……。

当初、交差点にある7階建てのビルの屋上から彼女の靴と遺書が見つかったため、“自殺”と判断されました。

しかし、聞き込みを続けていく中で、花屋の主人と言い争っているのを見たという目撃証言が出てきました。

また喫茶店のマスターとは男女の関係があり、既婚しているマスターと最近険悪なムードになっていたという情報も入ってきました。

警察は状況を整理して、この事件を簡単に“自殺”と決めつける事が徐々に出来なくなってきました。

そこであなたの知恵を貸してください。

この事件、“自殺”なのでしょうか？
それとも、“他殺”なのでしょうか？

「――皆さん協力よろしくお願いします」
話終えた香苗は真面目な表情をして、俺たちの顔色をうかがっている。俺たちもまた香苗の雰囲気に飲まれて、真剣な面持ちで捜査に乗り出した。

「う～ん。確かに難解な事件ですね。この場合一人の意見だけで事をまとめてしまうのは、良くないでしょう。北山警部補、あなたはどうお考えですか？」
刑事になり切っている由奈は、まず翔の意見を伺った。

「はい、森下警部。オレは自殺と断定して良いのではないかと思っています」

「それはどうしてでしょう？」

「現場の状況から見て、自殺以外に考えられません。それに、あのビルには良くない噂がたっていたようですし、そこに彼女が行った事を考えると、彼女の精神状態に何らかの異常があったのではないかと考えられます」

「なるほど」
森下警部は北山警部補の意見に深く頷いていた。
「それでは――」
森下警部の鋭い眼光が俺の元に向けられる。俺にも意見を言う番が来たらしい。
「それでは、山田さん。お話を聞いてもよろしいですか？」
山田さん？
あれ？　俺の名前には警部や警部補のような役職はつかないのか？
「山田さん？」
もしかして、刑事ドラマによく出てくる“山さん”のような愛称のつもりなのか？
……と言う事は、この中で一番上の立場に立つ人間って事になるじゃないか！
こりゃ、下手な意見は言えないぞ。
「山田さん、大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ。で、俺の話が聞きたい、とそう言う事かね？」
「はい」
「うむ、わかった。俺が思うにこの事件は、他殺である可能性が高

い。一見自殺に見えるような状況だが、それは犯人の巧みな罠だ。ハッキリ言って、こんな初歩的な事も見抜けぬ北山君はまだまだ修行が足りんな」

威風堂々とした俺の態度とその物言いに、森下警部と北山警部補はただ茫然としていた。

まあ2人には悪いが、この俺が言うのだから事件は解決したも当然だ。

意見が言えず、残念だったな、由奈。

俺は沈黙を続ける2人を憐れみながら、余裕の笑みを浮かべていた。

「あ、あの……山田さん？」

正気に戻った翔がようやく口を開いた。

「すみませんが、何をおっしゃっているのか……」

「私もちょっと分からないのですが……」

「おいおい、君たち。俺の言っている事が分からないのか？　この事件は“他殺”だと言っているのだよ。これは間違いない！　ベテランの勘がそう言っている」

「あの……ビル管理人の山田さんがそうおっしゃられても……」

「え？　俺……刑事じゃないの？」

「はい」

な、な、なんだって！！

じゃあ、今まで刑事でもない素人が偉そうなことを言っていた、という事なのか！？

ちょっとそれ……恥ずかし過ぎるぞ。

由奈と翔は訝しげな表情で、俺の顔を見ている。どうやら状況が掴めていなかったのは俺だけのようだ。

じゃあ、さっき俺が言った“ベテランの勘”って何なんだよ！

ビル管理のベテランに、どんな勘があるんだよ！

先ほどまでの自分の行動を蒸し返していくと、俺は穴に逃げ込みたい気持ちになっていった。

「山田さんがそう思われるのは勝手ですが、主張は出来るだけお控えください」

「す、すみません……」

「それでは、あなたのビルに流れているという悪い噂について――」

その後、俺は肩身を狭くして由奈の質問に答えた。まるで尋問されているような、そんな感じだった。

結局ハッキリとした証拠を掴めぬまま、事件は迷宮入りしてしまった。

結論の出ない俺たちは香苗に答えを聞いた。その答えを聞いたとき、由奈も翔も「なんだよ、それ」と不満を漏らした。まあ、それ

はそうだろう。事件は初めから解決していたのだから。
『四つ角殺人事件』。このタイトルがすべての事を物語っている。色々な伏線が張られていたものの、結局のところこの事件は“殺人”事件なのである。つまり、人に殺された事件――“他殺”というわけだ。ビルの管理人が勘で“他殺”だと言っていたが、ズバリそのとおり。案外素人の勘もバカに出来ないものである。

香苗からのクイズはその後も続き、いつしか俺たちの頭脳も疲れを感じ始めていた。
重たくなってきた瞼。時々出てくるあくび。静かになっていく車内。条件の揃った俺たちは、一人、また一人と睡魔に襲われ、抵抗むなしく倒れていった。
そして、現在の生存者はただ一人。そう、俺だけである。

俺は倒れた友の顔を見ながら“そろそろ俺も……”と考えている。だが、床に就く前に最後にやっておきたい事があった。
隣で安らかに寝息を立てている翔。前の席では、由奈と香苗が肩を寄せ合って涼しげな顔を見せている。その光景を目に焼き付けて、俺は再び心のアルバムを開いた。
最後のページに飾られた幸せそうな友の顔。この旅行がどういうモノだったのかを素直に表現している。最後の作業を終えた俺はそっとアルバムを閉じた。閉じられたアルバムを記憶の引き出しになおそうとした時、アルバムに見出しがない事に気が付いた。

思い出のタイトルかぁ……。

この旅行のすべてを一括した名前として『修学旅行の思い出』という言葉が浮かんだ。しかし、何の工夫もなく、この旅行の楽しさを伝えきれない名前に、俺はこの言葉を使う事を却下した。

他の候補を考える俺は、旅行だけに絞っていた視野を他の場所にも広げていった。

7人で作った修学旅行の思い出。この7人がいつも一緒にいられるのも、良く考えればあと4ヵ月程度。卒業と共に俺たちの進む道は、別々の方向へと枝分かれしてしまう。

俺と翔と由奈と美奈子は、進学校である緑川高校を受験する。
拓登はバスケの強豪、行森工業高校への推薦をとっている。
江梨香は松橋商業高校へ、香苗はユメリア女学院へ、それぞれの進路を希望している。

7人で修学旅行に行けるのは、これが最初で最後だ。
それを考えていると、頭の中にあるタイトルが浮かんできた。楽しそうな雰囲気が伝わってきて、7人で過ごした日々を思い起こせるタイトル。

俺はアルバムにそのタイトルを添えて、記憶の引き出しにしまった。そして、静かな車内の雰囲気に包まれて、溶け込むように眠りへと落ちていった。

引き出しに入れられた一冊のアルバム。

タイトルは『“3バカ”と“ツインタワー”と2人の女の子』。

１０．（最終回）物語は終わらない……

楽しい出来事には、終わりがある。
どんなに願ったとしても、終わりが来ない事などない。

季節の訪れに世界が変化を見せる限り、時計の針が進むことをやめない限り、終わりというものは必ず存在する。それが楽しい出来事であろうと、悲しい出来事であろうと……。

俺たちの旅も終りを迎える。
俺たちがいつも7人で居られる事にも、やがて終りが来る。

冬が春を迎え入れる時、俺たちも別れを迎え入れなければならない。別れを避ける事は出来ないとわかっていても、俺はそれを容易（たやす）く受け入れることなど出来ない。他のみんなだってそうだと思う。だから、今という時間がどれだけ大事であるかを知っている。みんなで過ごせる今が幸せである事を知っている。それがわかっているから、俺たちは笑顔で居続ける事が出来るのかもしれない。

あと数か月後に訪れる惜別の時。

その時、俺たちは笑っていられるだろうか？
悲しんではいないだろうか？

きっと涙を浮かべながらも、笑っているに違いない。だって、そこですべてが終わるわけではないのだから……。

俺たちの物語は、まだ始まったばかり。
これから始まる長い物語のスタートを切ったばかり。

まだ見たことのない世界がたくさんある。悲しい事や辛い事もあるだろうけれど、それ以上に楽しい事や嬉しい事が待っている。
悲しんでいる暇などない。前を向いて、一歩を踏み出すんだ。

さぁ、共に歩み続けよう！
この先にある明るい未来に向かって。
いづれ訪れる再会の日を、心の中で信じながら……。

《エンドロール》

《読んで下さった方々へ》

最後まで読んで頂きまして、誠にありがとうございます。

この作品は、現在考えている学園コメディ小説（ほのぼのした作品になりそうですが）『七つ星の願い』の数か月前という設定で書き起こしました。途中登場人物の説明を挟んだため、説明文の多い小説となってしまいました。また、私の不甲斐無い文章で描かれていたため、読むのが退屈だと思われた方もいらっしゃったと思います。そこで、皆さんの目でこの小説を書いていくべきなのかどうかを審議してもらおう、と思います。

というわけで……いかがでしたか？

ありふれたストーリーに、ありがちな設定のキャラばかり……あまり楽しめなかったのではありませんか？

嘘でもいいので、「んな事はない！」と言ってもらえれば嬉しいです（笑）。

“まだ読みつづけてもいいよ”と思って下さる心優しい方のために、最後は本作品に登場したキャラクターからの挨拶で締めくくりたいと思います。

《登場人物からの挨拶》

【作者】
まずは、主役を務めました山田　浩介（やまだ　こうすけ）君です。
【浩介】
皆さん、俺たちのバカな日常を真剣に見てくれてありがとう！　これからも温かい目で見守ってもらえると嬉しいです。今後とも、どうぞよろしく！
【作者】
ありがとうございました。“３バカ”の仕切り役、浩介君でした。
【浩介】
ん？　ちょっと待て。今俺もバカに入れただろ？
【作者】
え？　いや、そういう設定だし……。
【浩介】
確かに“３バカ”と言われているけど、俺はそこまでバカじゃないぞ！
【作者】
わかってるって。だって、お前がいないと……（涙）
【浩介】
な、なんで泣くんだよ！
【作者】
自分で言うのもあれだけど、お前がいないと話が進まなくなっちゃうんだよ。だって由奈と翔を野放しにしたら、話があっちこっちにいって収集がつかなくなるし、あの２人だけだとストーリーがつまらなくなるし……。本当にお前がいてくれてよかった。
【浩介】
べ、別に……大した事してねえよ。
【作者】
コウスケ――――！
【浩介】

うわぁぁ！　抱きつくな！

……作者の涙が止まるまで、しばらくお待ちください……

【作者】
取り乱してしまい、すみませんでした！
では続きまして、ヒロインである森下　由奈（もりした　ゆな）ちゃんです。
【由奈】
応援して下さった皆さん、ありがとうございました。本当に、ありがとうございました。
これからも応援よろしくお願いします☆特に私への応援があると嬉しいです。
それでは次回作でお会いしましょう、じゃあね！（＾＾）！
【作者】
ありがとね、由奈ちゃん。さて、つぎは……。
【翔　】
ハイ、ハイ、ハーイ！　次は、オレ！
【作者】
そんな慌てなくても、ちゃんと紹介するから……。
【翔　】
だってよぉ、いつになったらオレの紹介してくれるのか、気が気じゃなかったんだもん。
普通オレが一番初めに挨拶を……って、オレ主役じゃなかったのか？
【作者】
残念ながら違います。
【翔　】
チッ！　まぁ今回はいいや。

次回からはオレが主役、だもんな。
【作者】
（う～む。それも違うんだけど……）
【　翔　】
次回『ｓｈｏｒｔ翔としよう』という短編小説で会おうぜ！
【作者】
（予告が長々と語られて、なんで本編がショートにまとめられるんだよ！　そんな都合のいいことできるか！　しかも、意味のわからんタイトルをつけやがって……書く側の気持ちを考えろ！　まったくストーリーが浮かばんわ！）
【　翔　】
じゃあな！！

【作者】
……。
え～と、次は高山　拓登（たかやま　たくと）君です。
【拓登】
翔の言う事は無視していいですよ。あいつバカだから……って、みんな知ってるかぁ。
さて、俺は今回イイ所なしで終わったけど、次はもっといかした男になってみんなの度肝を抜いてやるから。それじゃあ！
【作者】
作品を盛り上げてくれよ、拓登！
次は、この人です。
【江梨香】
何なの、この雑な扱いは……。まあ、いいわ。
皆さん、どうも。原　江梨香（はら　えりか）です。あたいも今回サブ的なポジションで出演しました。名前を覚えてもらえたか、少し心配です……（覚えてなかったら、叩き潰すけどね☆）。今度はもっと存在感を出せるように努力しますので、どうぞよろしく。で

は……。
【作者】
はい、ありがとう。そしたら……ん？
エ、エリカ……さん？　どうしてこっちへ近づいてくるのかな～。
【江梨香】
ウフフフフ。
【作者】
ヤ、ヤダなぁ……そんな怖い顔して。わ、私は別に悪い事など――
【江梨香】
なんであたいが途中出場なのよ！　２話目って、あり得ないんだけど！
【作者】
ちょ、ちょっと！　追いかけてくるな！　い、イヤぁぁぁぁ――――

……しばらくお待ちください……

【作者】
ハァ、ハァ、ハァ……。
なんとか……江梨香さんの……武勇伝を……書く……という事で……和解しました……。
え……と次は……美奈子ちゃん……お願い……。
【美奈子】
だ、大丈夫ですかぁ？　『……心配ない。先を進めてくれ』？　わ、わかりました。

【美奈子】
改めまして、長瀬　美奈子（ながせ　みなこ）です。

皆様には見苦しい姿をお見せしまして、大変申し訳ありません。私が司会を引き継ぎましたので、このような不祥事がないよう責任を持って進行していきたいと思います。
それでは、次は……えっ！？　もう最後？　そうなんですかぁ……なんだか寂しいですねぇ。では、ラストお願いします。
【香苗】
トリを任されました須藤　香苗（すどう　かなえ）です。
皆さん、あたしたちの物語を読んで下さってありがとうございました。あまり出番がなくて影が薄かったけど……あたしなりにがんばりました。これからどうなっていくか不安だけど、がんばります！
【美奈子】
大丈夫だよ、香苗ちゃん。私もあんまり出番なかったから……。一緒に頑張っていこうね？
【香苗】
美奈子ちゃん……。うん、頑張ろう！
【美奈子】
これからも私と香苗ちゃんをよろしくお願い致します！
そしたら……、あ！　作者さん、立ち上がっても大丈夫なんですか？
【作者】
美奈子ちゃん、ありがとう。もう完全復活したから大丈夫だよ。
【美奈子】
それは良かったです。
【作者】
それでは、バトンを引き受けましょうか？
【美奈子】
よろしくお願い致します。

【作者】
はい。以上、登場してくれたみんなからの挨拶でした。

今後も機会があれば、またこのメンバーでお会いしたいと思います！
それでは――

【　翔　】
ちょっと待った！　機会があれば……って、オレ主演の短編小説は？
【江梨香】
翔の話は別にいいとして、あたいの武勇伝はどこにいったのよ！
【作者】
ちょ、ちょっと2人とも！　今最後のあいさつをしてるんだから……。
【江梨香】
そんなのはどうでもいいわよ！　それよりあたいの話、書いてくれるんでしょうね？
【　翔　】
オレの話は！？
【浩介】
おまえら……何勝手に前に出てるんだよ！
俺も前に出させろ！
【由奈】
ずる～い。それなら私も！
【美奈子】
あっ！　わわわわたしも～。
【香苗】
ちょっと、美奈子ちゃん。待ってよぉ～。
【江梨香】
翔！　そんな押さないでよ！
【　翔　】
ち、違うって。後ろから浩介たちが押してくるんだよ！
【浩介】
前に陣取りやがって……少しは俺たちにも席を譲れ！

【由奈】
く、苦しい……。
【美奈子】
ご、ごめん。由奈ちゃん、大丈夫？
【由奈】
な、なんとか……。
【香苗】
由奈、安心して。あたしたちが代わりに、前に出てあげるから！
【由奈】
それはダメ――！！
【拓登】
みんな、落ち着けぇぇぇぇ！！！

……。

【拓登】
よ、よし！　ここはみんなのリーダーである俺が……。
【江梨香】
誰がリーダーだって？
【拓登】
お、俺……じゃなかったっけ？
【浩介】
そんなのはどうだっていい。ただ、おいしい所を持っていこうとするのは見過ごせん。
【作者】
まぁ、まぁ。みんなそんなにいがみ合わないで。仲良くしようよ、ね？
【江梨香】

何仕切ろうとしてるのよ！　不細工な顔してるくせに。
【ブサイク作者】
だ、誰が不細工だって？
【由奈】
しかも……変人？
【ブサイク変人】
ちょっと、待て！　不細工で変人って……救いようがないじゃないかよ！
あれ？　名前まで変わってるし。ちょっとどうなってるんだ？　俺の指よ、しっかり動け！
【江梨香】
まあ、正直な指ですこと。
【〇〇】
……。このヤロー、もはや表現する術（すべ）を失くしたか。
はぁ……頭の中にいる奴らにはいいように振り回されて、体は俺の意思を聞こうとしない。
そんな俺って、いったい何なんだろう……？
【香苗】
確かに。この人の中にいるあたしたちって……。
【美奈子】
作者さん……もしかして、多重人格？
【〇〇】
頼む！　これ以上は何も言わないでくれ。

……。

【作者】
はい、異常をもちまして、物語を終わらせていただきます。こんな

書き手ですが、今後ともよろしくお願い致します。
それでは皆さん、次回作で会いましょう。では……

【作者】
Ｓｅｅ　ｙｏｕ！
【浩介＆由奈】
またね！
【　翔　】
あばよ！
【拓登】
じゃあな！
【江梨香】
今度はあたいが主役よ！
【美奈子＆香苗】
さようなら。

……。

【作者】
最後くらい……ちゃんと合わせろや！！
【由奈】
何よ、Ｓｅｅ　ｙｏｕって。そんな事言うなんて、わかるわけないじゃない！
【　翔　】
ちょっと、江梨香！　何自分だけ宣伝してんだよ！
【江梨香】
あんたも同じことすればよかったじゃない。
【美奈子＆香苗】

ちょ、ちょっとみんな……。
【作者】
俺の考えくらい読めよ！　何年俺の頭の中で生活してると思っているんだよ！
【由奈】
あんたの考えなんて読める訳ないでしょ！　ウーロン茶の事をウーロンティーって読んだりするバカ、見たことないわよ！
【　翔　】
江梨香、言っておくがオレの物語の方が先に書かれるんだぜ。おまえがいくら宣伝したところで、何の意味もない！
【江梨香】
バカね、翔。あんたの物語なんて、書かれるはずないじゃない。それよりあたいの話をした方が、みんな読みたがるに決まっているわよ！
【美奈子&香苗】
みんな……いい加減にしなさい！！

……。

【浩介】
はぁ～、いい加減そろそろ終わりにしようぜ。
俺疲れてきたし、読んでる人も疲れてるだろうから。
【作者】
そ、そうだね。
それでは気を取り直して……

「今度の主役はぜったい、俺（オレ、私、あたい、あたし）！！」

《完》

《エンドロール》（後書き）

最後まで読破していただき、ありがとうございました。作者及びキャラクター一同、貴方様にお礼を申し上げます。

誠にありがとうございました☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3952d/

“３バカ”と“ツインタワー”と２人の女の子

2010年10月9日13時29分発行